

鐵網錄



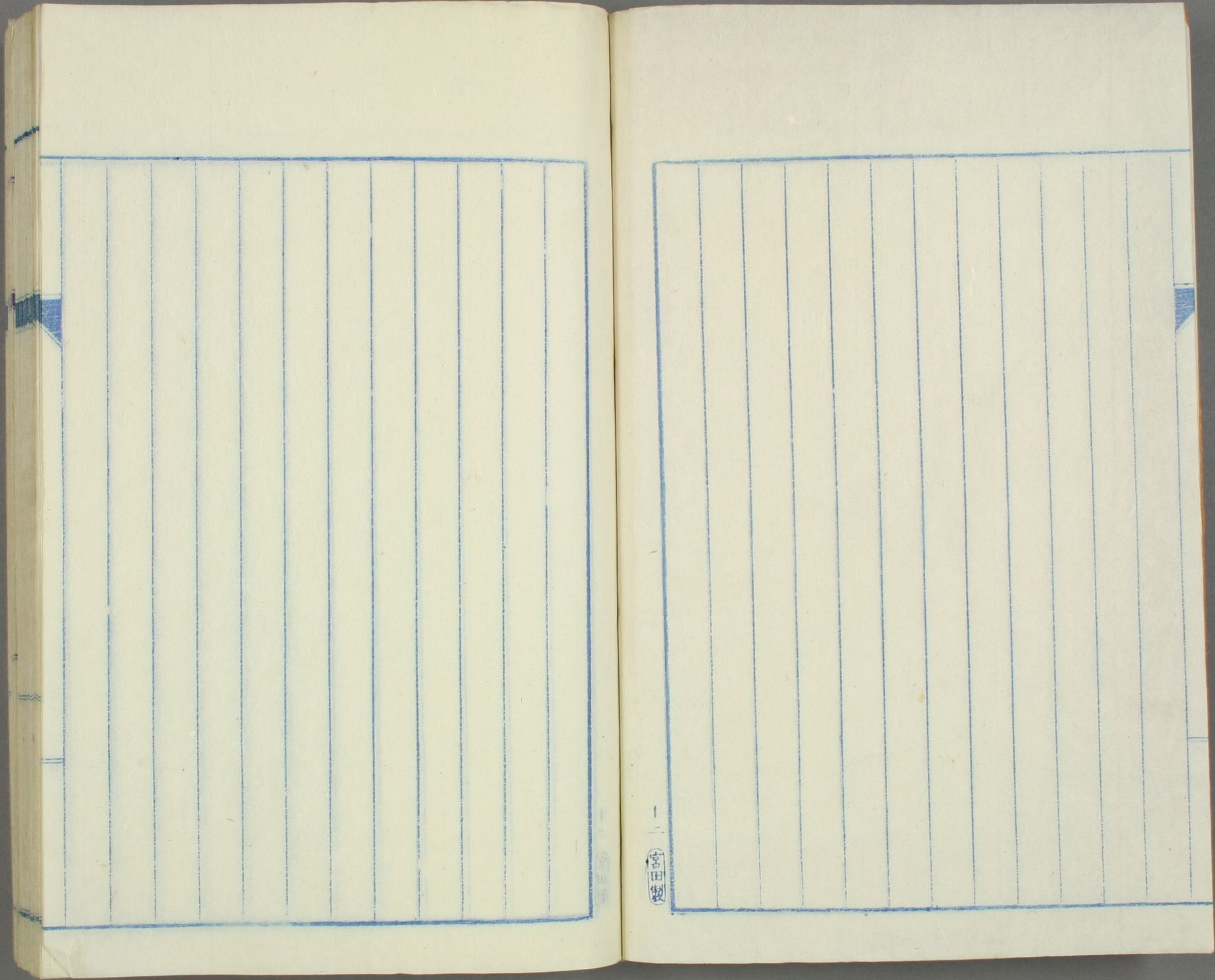
一

特別
14
1919
4

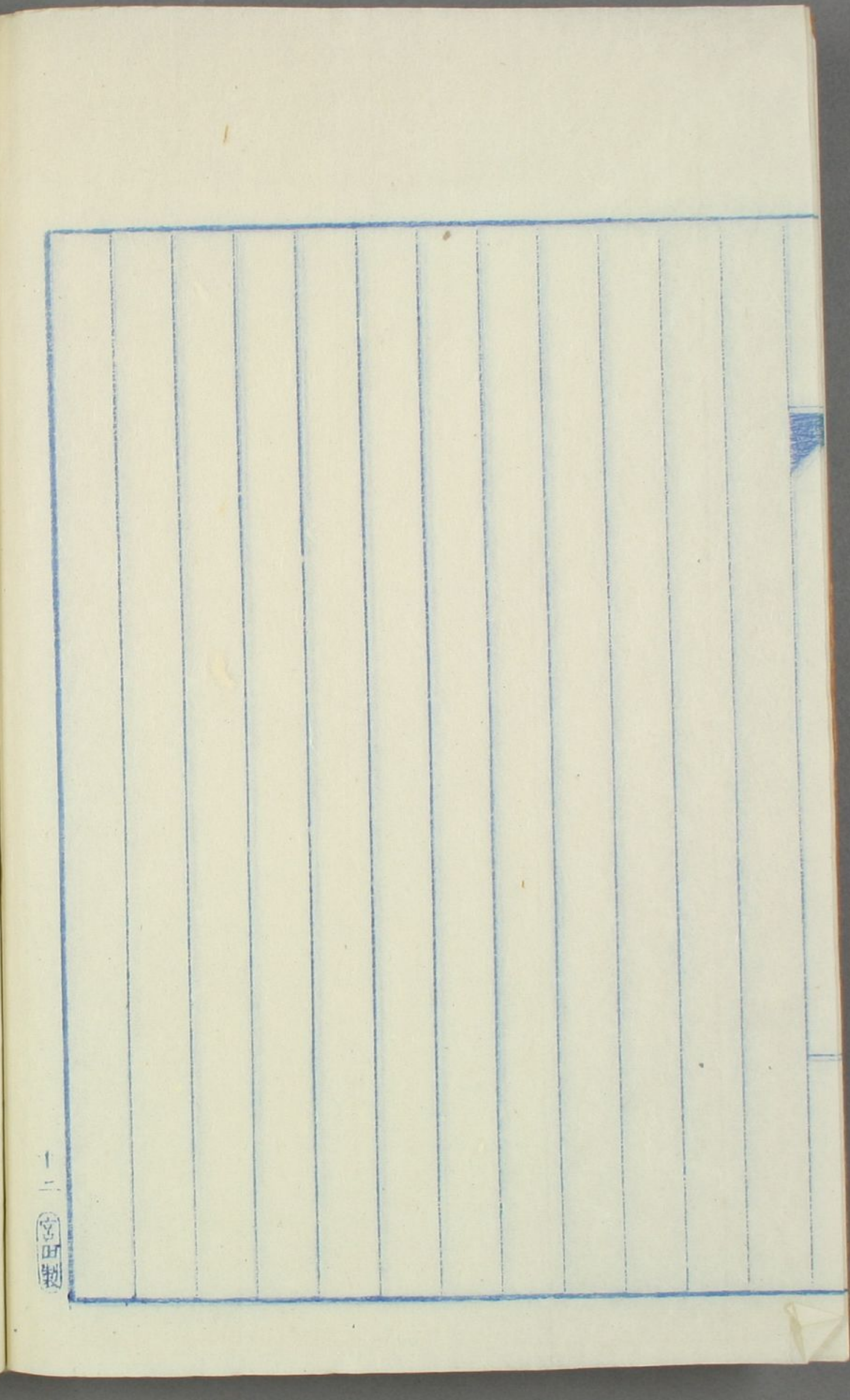
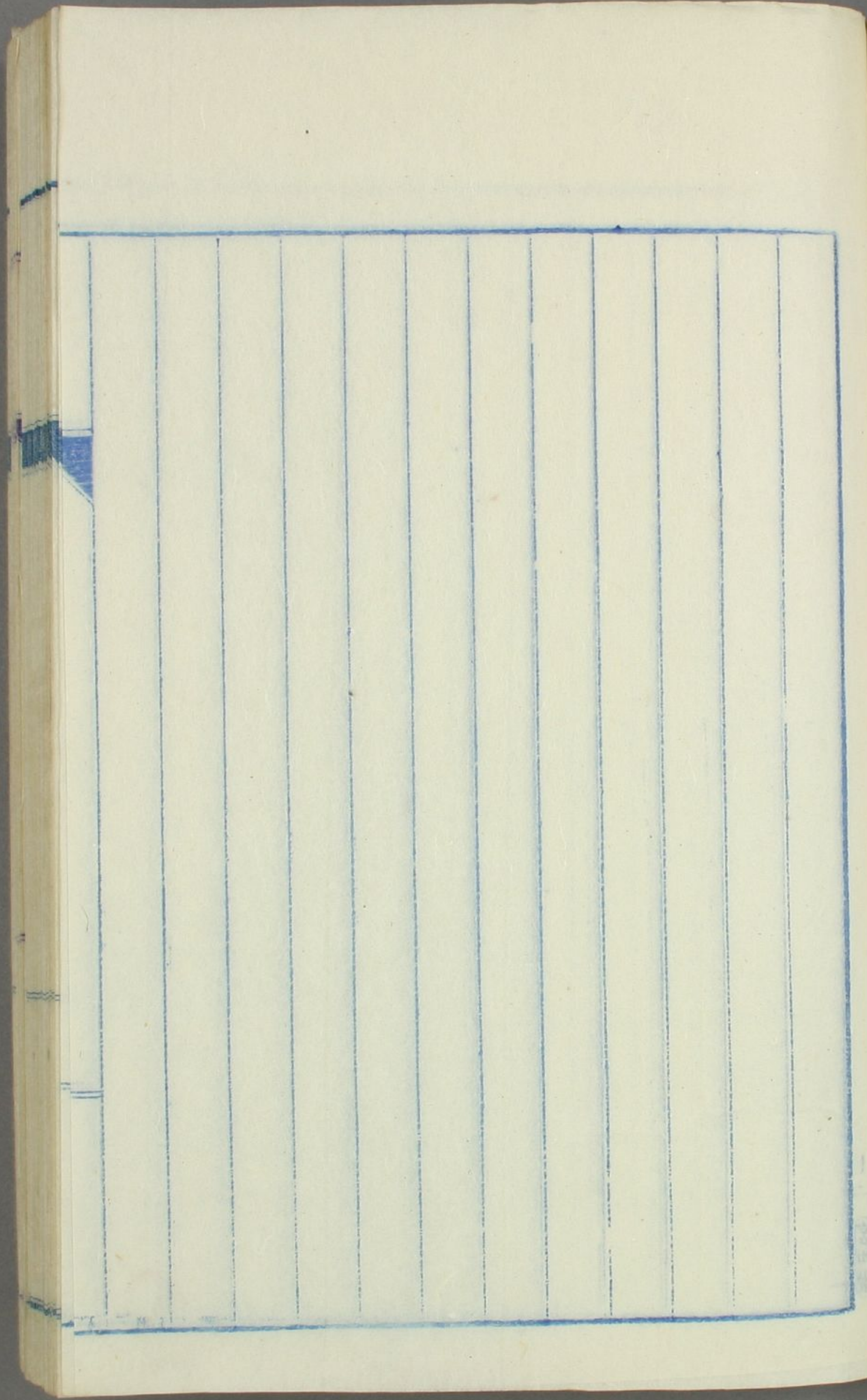


A ledger page with a blue grid of 12 columns and 10 rows. The grid is defined by blue lines. The first column is significantly narrower than the other 11 columns. The page is otherwise blank.

38- 8833



—
1
時田樓



○生死の間にも心常に己か嗜む所にあり

英民和久曼氏ハ日本へ唄画を傳習せる鼻祖とも称す
き人なりこの人前年横濱に在る中何加過失ありて同国
領事自ら出庭して懇ろに説諭ありしに氏ハ俯頂黙聴し
て最初より一度も面を挙げず領事ハ心に思へらく彼れ
ハ余か叱責を畏みてかく黙聴をるなるつしと益々氣を
勵まし説諭をなし居たりしかやうて其説諭も終りたり
に氏ハ尚ほ依然頭を上げされは領事は初めてこれを怪
み前刻より申聞たる次第ハ如何心得居らるやと念押
して尋ねしに猶頭を低れて返答せされは領事ハ大に急
迫ハ夕と机をたきしかは氏ハ始めて身に入りし面持

にて不思議をふに頭をあけしと領事ハ言を改めて如何
に前刻よりの申聞けハ承領ありしやと問ひたり然るに
氏の合點の申かぬ面もちしてイヤ前刻より何を申聞
になりしか一向身に入り申さず僕は前刻より貴官の背
の窓より此「テーブル」の下の敷物に注射する太陽の光線
の色の面白さに如何なる繪の具を用ゐるは斬々色を生
ずへきやと餘念なく工夫いたし居り候ひぬと答へしに
そ領事ハ餘りの事とあきれ果て先づ今日ハ飯へらるべ
しとて退かしめしとぞ又氏に就きて一話あり曾つて攘
夷論の盛なり時生麦の憂より英國軍艦某号は麻見嶋灣
に入りて談判申遂に開戦となりたりしか氏も此軍艦に
在りて一日朋友と密に上陸をしたるとこゝ薩人に見と

らめられ後刀にて追かけられしかは或寺院へ逃げこみ
て早くも本堂の椽の下へ身を隠し今一人の朋友加追詰
められ膾の如くきりたし居る、を隙見しつやかて
鉛筆を取出してその状態を寫しこれを今に保存して時
々人に示しその時の物語をなると云ふ

○妙手の手巾尺度規矩あり

天明の頃則ち今より凡そ九十年前東京なる深川の洲崎
に升屋といふ有名な割烹亭あり主人宗助ハ庖丁に名
を得しのみならず而かも頗る好事家にて家の経営善美
を盡し庭園の所々に数寄屋を建設け鞠場をさへ構へ香
茶蹴鞠何くれとなく客の需に應じて隨意に酒興を添へ
しむされば當時貴人公をばしめ文人墨客富商豪農皆を

争つて此亭に就き醜飲を宗助号を升億と称し俳諧を嗜
みけるかある時さる緒紳家の小集に召され宴に列なり
しか折しも主公へ澁刺たる大鯉魚を献せし者ありしか
は折こそよけれと宗助に庖丁を命をるに宗助笑つて今
日の御會にてを召され料理にハ参上いゝをさずされと折
角の御意なればあらく庖丁仕つるべしとやうて厨刀を
もて造作もなくズタ／＼に截断し今日ハ先これにて御
暇と乞ふべしとて遽然斂り去りしかは一坐皆興をさま
しけるに主公姑らくかの截断したる肉を熟視しありし
か急に侍臣を召て尺寸を試みしむるに手にまかせて譯
もなげに截りたる肉名々一公一厘の差異なかりしかは
満座其伎倆に服せしとて此事酷たギオットーの話と相

似たり伊太利のギオットー(千二百七十六年生る)画名極
めて當時に高く来つて描摹を乞ふもの千里相陸むに至
る羅馬法王ボニフエース第八世其名を聞き之を羅馬の
都府に聘せんとし先づ近臣一名を遣りギオットーに就
て其技の巧拙を試みしむ使節乃ち其家に至り王の命を
傳へ且つ速かに其画を製して奉らんことを述べギオット
ーハ使節に対し其懇懇の情を謝し即ち坐右に就て有
り合ふ紙を展へ鐵筆を把つて腕を腹側に密隠け手を運
轉して容易にまろき線を急かき之を使節に授けて斂つ
て法王に呈せしめんとす使節大に怒つて曰く王汝か名
を聞き百里を遠しとせしめて特使画を命を汝宜しく数
月の精神を注ぎ山水若くハ人物の丹精を竭して以て其

試駭に意をへし今や然らるを却て此反古の如きものを以て王に奉らんとを不敬も亦甚しきにあらるやと然れどもギオワトリーハ笑つて答へて志つかに昏藉をひらいて朗讀を使節已むを得をぬつて其由を復命し且つ其画を奉る法王ひらいて之れを見るに因縁真にふんまはしをかして毫もわきよ出入せず是に於て手をうち其巧妙を歎賞し乃ち聘を厚くし辞を恭しうしてこれに致すこれよりしてギオワトリーの名更に歐洲に藉々せしと云

○異歌奇吟

世に好事の人ありて種々の吟詠を為せり今左に其一二を掲げん但し其の中に法則に従へるあり法則に従はざる真の戯吟なるものあり今之れを類別せむ

漢和 是はもと連歌より出たるものにして詩歌並へ連ぬるものなり策彦と紹巴との百韻漢和の中に

難奈讀殘昏 と云へる策彦の句に

秋凡に夜行はたる吹きはて と紹巴の脇を附たり

又懐紙の中に策彦

沙濕履無声 と云へる句に

志のお夜の雨はなる／＼たぶりにて と附たり

和詩 是ハ唐土の詩に韻あるを見て歌に漢字を以て韻字を附けたるものなり

送人之美濃

鹿安道

松に多くの年をふり霜 相逢ふ秋の日さ一み一瀟
強顔き今日の別あり友 美濃の時雨の忘れぬ一桑

元旦

毛物子

天津み空に鶴やとひ買。 我か日の本の神ぞとふ懈。
 ふての林の花やさく蘭。 すりの海の波ハしづ蟹。
 押韻の歌 是ハ自然の調子にあらむとのなるし和歌
 にもこれあれとも今俚歌童謡の一ツニツを示さん
 さかハ照るてる鈴麻は曇るあひの土山あめかふる
 伊勢ハ津てとつ津ハいせてもつ尾張名古屋ハ城て
 もつ

又児もりの謡ふ手まり歌に

嬰児のおもりハ何所へ行た。 あつ山越江て果へ行
 た。 里の土産になにをらた。 どんどん大鼓にいぬ
 はりご。 起上り小法師に豆たいご。

義譯の歌

是ハ漢語を歌に詠みかへたるあり

明且之事薄暮不可薄暮之事晡時不可必

天有不測之風雲人有旦夕之禍福と云へる語を或人

あり有と思ふ心のあた様夜半の嵐の吹ぬものかは

又五色墨の蓮之の句に

流水不腐戸樞不蝕と云へる古語を詠み反して

精だせハ氷る向もあし水くるま

鸚鵡返し 是ハ終に一二字をかへて返歌するを云あり

大友左兵衛督義鎮(入道宗鮮)或る時北の方へ

飛くあよあめてをく野の女郎花思ふ方ハ凡ハ吹共

と詠て送られけれハ北方の返歌に

靡くまじあめてをく野の女郎花思ふ方ハ凡ハ吹共

難題 是ハ詠ミ難き題を設て歌を讀ましむると云ふ
後奈良天皇大友義鎮の歌(前に掲ぐる歌あり)を聞き給ひ
て叡感あらせられ或る時雪中早苗螢火灰と云ふ題を豊
後一指下され歌仕るべしと有しかば義鎮

雪中早苗

富士映る田子の浦ハの里人ハ雪の中にも早苗採也

螢火灰

終夜ともす螢の火も消て池のまこもに這かゝり見

○古賀精里翁言行

古賀精里翁の門人某氏が筆記に係る古賀精里先生言
行録と云へる一卷あり俗言俚語を以てありの終を記
したるさま却て其時の秋状思ひやられて面白く思は

る、ま、二、三、節を鈔録して讀者の覽に供す

先生の宅誓古の會讀に庭の穴藏を掘りて土をあけたる
上にて冢かつかひたるを皆々見て笑ひを忍ひ目を見合
せて居たりしか會讀終りて先生後ろを顧みて始め之
を見出し何たうの事もない昼夜の羞別もないといは
れしに皆々噴飯して大笑ひしたり趙子昂の道德經か重
復せしとて余と外一人とに圖取にて賜はるよいか、内
へ残さねハあらぬからとちらかよいか見合よと云ハる
揃ひたる方より端帖の方よろしき様なりと云ひしかば
さらはとて其の帖を抜き出し有合ふ小柄にて二つに引
截りて賜はる表紙迄も揃ひたるを一向頓着なく与へ玉
ふ気味よき事なり此事を伺庵先生精里先生の子に話せ

せしかばそれハ惜しき事をしたといはれたりしか又子
にても気質ハ者別るものあり先生曰く趙陶斎の許へ
禅僧来りて昏を乞ひしに小魚を釣て来らば昏をやらう
と云ふ昏かはしさに有て持て来て昏て貰ひと云ふと
かしい坊さんも有つたものた又曰く天文ハよさつしや
い屋根へ上つて凡をひくたけか損にたる莞翁曰く先生
の真率なる時々挨拶に困る事あり或時余に語りて曰く
おれが年を取つて淋しからうと云つて視歎か女を置け
と云ふかおれハ今あつてもよいか又先へよつてほしく
成た時にハわろいから只ウソと云つて置くか其言
かよからうと真四面にて相談せられしなり或る時先生
と訪ひしに先刻瀾斎翁が来てやかましく論じたてたか

ら先ハ雅にそつため少し昼寐をしたといハる、内尾藤
良佐様(三洲)が出ありと案内あり程なく尾藤先生ヒヨコ
タンソク入り来り(これハ跛躄なればあり)坐にありし夜
着蒲團も片付けず其終にて互に高声にお笑ひ餘念なく
談話せられし君子の交水の如きさま見はて感服したる
文化中对別へ出立せらる、時ある人餞別として京傳作
の草紙紙を呈したりしか其表紙に市川團十郎の暫の繪
か昏きてありしを見て是かサ唐にない顔たと云ハる余
其席に在りイヤ唐ハさておき日本てもこんな顔か本と
うに有てはたまらぬといひしか何一壺トツト笑ひたり
し烟管の鷹首と吸口とを瀨戸物にて焼たるを或る人贈
りしかば先生大によろこひ珍重して常に人に示されし

か或る人之を自らに恵まれしと思ひ推載き直に懷中に納めし時イヤ呉れたてはあいにいはいはれず先生の顔色いかにも本意なけに見えしハをかしかりしと莞翁の語

○白河乐翁猿乐を評す

猿乐に実盛戦死の事を演ずるとき天晴おのれハ日本一の剛の者と鞍の前輪に押付て首をかき切て捨てけりと謡ふ一節あり、これ牛塚か郎等と実盛引組て首をかき切にして尋常の伎にては左の手をもて敵をおさねたり形にして右に持たる中啓の扇を取り直し逆手にし前に引て首をかき体をするこゝなり松平乐翁公ある時猿乐の達人と聞えたり觀世太夫を召してこの伎を演せしめられしに觀世太夫ハ尋常の仕打にあらず又か傳授したる伎

を演したるに公喜ひ給ふこと斜ならず斯る伎藝ハ久しく見たることなし最とよく父の傳授を守りけるよと物数多賜ひたり後ち松浦静山候之れを聞き觀世太夫を召し乐翁の賞嘆されたるハ如何なる伎ぞと問はれしに太夫曰く鞍の前輪に推しつけてと謡ふとを左の手を向ふにし押つくる様にして右手の扇を持ち向へ押さる形し首搔き切りてと扇を取直し逆手に持ち捨けりと搔きすつる体をなすなり斯くせされはおしつくる意圖こにす人の首を切らんとするに争て初めより刀を逆手に持て搔き切るべきと答へたるに静山候も手と拍ちて嘆賞せられたりとせん

○醜優に窮む

二代目秀鶴(中村仲藏)の話に松若かりし頃ある所に田舎芝居ありて旅俳優某等まかりて志臣藏を演したり然るに其折九段目の小浪の役を勤めたる女形ハ甚たしき醜顔の男ありしかは彼のお石ハ名瀬商人談判の末弥々齋縁と事きまり定例の如くお石ハ奥へ入るあとにてテ名概ハ娘に向ひおさまりの愚處をこぼし十人並にはまさつた娘云々といふ処おれと前に降る如く小浪にありし俳優あまりに醜くかりしかは流石に定例の如くいひかねて屢し思案したりしか臆てマア十人並に生れた娘といひしとそ

○信又も亦師とするに足る

不可院左近ハ觀世太夫と時を同ふして猿乐に名聲を博

したるものあり左近最も木賊曲は妙を得たるを以て常に之れを演して觀者の喝采を博せり或る時例よりて此枝を演する最中群がる來觀人中一人の信又の声を放て嘲笑するものあるに左近ハ心を得て枝終りて後信又につき何故に我藝を笑ふやと問ふに信又は僕田野に朝夕を送るものなれハ斯くみやひたる業ハ知らねとて僕木賊を培養して口を糊することこハ数年なれハ聊ら木賊を演るの術を知れりイデお話致すへし木賊ハ元來薊り悪き草よて尋常の鎌の用ひ方にては鎌はすへりてか、らぬものあり木賊に限りてハ必ら鎌を逆さに用ひ前より掛て後より引か屯後らより前へ向けて薊り上くろを例とを然るに今貴殿の伎を見るに鎌の用ひ

方其実に似さるか如く覺ゆるま、思はず一突せる有り
と左進の聞き果て、大に悟りこれよりこの儘又に就て
木賊の蒞り孫を學ひ其藝益々上進せりと云ふ

○佐々木志頭磨の逸事

佐々木志津磨は能昏を以つて名あり加賀候曾て之れを
招聘し旗号を昏かんと命を志津磨命を受けたり
直不稿を起し数月を累ぬるも成らず白布二十張を尽し
て始めて適意の一福を得て之れを候に呈したりと又一
日候即座に字を作らんことと命し給ひければ志津磨ハ
臣の字忽ちに作る可らずと辞したり然るに左右に待
べりたる諸臣ハ頻りに君命に應ずべき旨を迫りければ
志津磨ハ慄然として吾れ豈に官事を以て吾節を改めん

やと教化して何処ともなく去れりと云ふ又曾つて京師
に在りたる頃妙法親王其能昏を聞き下馬牌を昏んこと
を請求し給ひたるに数月を経るも成らざるにぞこれ必
常彼れか怠慢に出るものならんと役人を遣して痛く遷
延を詰らせ給ふに志頭磨ハ最大きやかある筈二ツを取
り出して役人の前に差置きたり役人は其故を知らされ
と誠みに其蓋を開くに満座皆存下馬牌の三字を昏した
る稿にてありければ役人ハ驚き且つ怪しみ斯く沢山に
認め置きながら何故今日まで親王へ奉らざるかと云ふ
に志頭磨は客を改め未だ意に適したるものを得ざるに
そ計らる遷引に涉りたりと答ひたりと云ふ

○才子佳人を悼む

倭文子ハ縣門加茂奥洲三才女の一人にして江戸京橋弓
町の豪商伊勢屋集の女なり資性敏慧にして姿態艶麗人
皆其哥文と神姿と共に清楚綽約なるを稱す然るに不幸
不して病不羅り醫藥効なく年僅かに二十にして竟に歿
せしかば縣居翁の哀惜最も甚しく隨て月門の人は遠近
親疏を論せ之を悼む事殆んど兄弟姉妹を喪ふ如く竟
して長短歌もたは文章を寄せて之を弔し一時海内を動
かすに至る此時の歌文載せて文布倭文子家集の巻尾小
あり今現に世に行ける然るも此哀悼歌中縣門の諸家苟
くも名を世に知られたる人々ハ皆載せざるなきを獨り
藤原宇萬伎ハ倭文子生存中最も親しく交りたる人なる
と宇萬伎の母の歌ハ見申れと宇萬伎の歌文のみ見はさ

るハいふと云ふに抑々宇萬伎縣門に在りて亦風流才
子の名あり気度俊邁容姿閑雅當時稱して今業平と目せ
らるゝ不至る才子佳人の意自から相投する所あり所謂
遠くて近きならハ竊ら小相許すことやありけん宇萬
伎二十七にしてなほ他に娶らす倭女子亦嫁せずして互
に期する所ありしと心事果さを志て却て門友の間を以
つて之を悼むに至り忍び難くやありけん終に其名を顯
さす讀人しらすと云を以て

獨のみ思ひつくけてなけくかな

人にいふへきむかしならねは

といふ歌を寄せて之を哀しめり此歌今載せて哀悼歌の
中にあり風流の逸事と云ふべし

○鹿子木親員と山崎宗鑑

鹿子木親員ハ天文の頃の武人ホして武名高く又た平生
禅学に志し咏歌風流の道に長したり或時川尻なる大慈
寺に遊ひしに境内蓮池の畔に立孔ありて人勿折此蓮但
問花有对当折而飯」と答き付けたら親員乃ちその傍に蓮
葉の池の小浪よることに花のくちひる動くとを見る
と矢立筆にて答つけ蓮花を心のまゝに折取りて立ち飯
れりと又山崎宗鑑ハ足利家の臣にて当時和歌連歌の達
人の淵にあり或人尻毛を傳ふしづくたく」といふ附
句を乞へたるに「水鳥の尾羽根の氷り今朝とけて又切た
くもあり切りたくもなし」といふに三句を付けてよとい
へば宗鑑取り敢はす「盗人を捕へて見れハ我子なり」とい
ふ

かなる月をかくせし花の枝「心よきまよのすこし長き
を」と吟し出てたりと共に即妙巧匠と謂ふ可し

○野人名画を評す

円山應挙ハ写生画の妙手なり曾て自ら思へらく宇宙間
の活物其類幾んど際限あらざるを悉く実物に就て寫さ
まくするハ極めて難き事なり若かす得易き物に就き其
精を極めんにハこれより日々祇園の祠邊に徘徊し犬
或ハ鶏の類を見て其実秋の如何を極め家に飯れば筆を
取り一向に寫意を凝す程に日ならずして其の精妙を得
たりと思ふまゝ、臆て一面の扁額に鶏の図を描しこれを
祇園の社に献しつゝ世評を聞かんと為り日々門弟をか
しこに遣し觀者の批評を聞かしむるに一日門弟遠くし

立ぬりて師に向ひ今日しも一人の儵父あり夫の扁額に
眼をとめて頻りに賞歎したる末この鶏の傍らに艸を
画かて置しこそ殊に妙なれと獨語ちつ、立去りぬ心得
難しと思ひし故追跡して行きたりしに東洞院に入り候
と云ふ應舉聞き果て、思案しつ其の翌日酒宴を設け彼
の儵父を招き先づ前日の賞詞を謝し且つ何故傍へに草
を描かて置きたるか妙なるや教へ給へと尋ぬるに儵父
は額を撫て僕元来愚かにて画の巧拙を知るものならね
と唯々鶏ハ此年頃家にて飼養せるをもて其毛色の四季
によりて同じからざるハ能く〜知りて候に責下の描
させ給ひにし彼の鶏の毛色こそ全く冬の毛色なるに殊
に傍に艸なきハ冬の季節を表し候と〜真に過るもの

あるにぎり覺はす感入りて候ひしと云ふに應舉も小
膝を直め齋しく感歎したりしとそ

○新井白石八景の話

少しも咏める如にハ必ず八景を稱す素と八景の始めは
宋人が元人が宗復古と申す名画山水に妙を得たるか一
軸を画して凡そ一代の出来に候を人々其の興ある如に
名を題し終にハツの名出来候画様に隨ひ候故の事と申
候これより好事の人詩をも題咏し候きそれを又ハツと
し候とハ沈約か八詠樓に倣ひ候共申し李太白金華洞八
景と申す一句により候共申候か本邦にてわけて取はや
し候は東山公方の御物に玉潤か八景候故と聞は候され
とこなたの景をそれに擬し候事になり候ひハ慶長元

和の頃ほひ京の田光寺の長老故有て近江に藝居の時に
近江の景を蒲湘の八景の題を用ひて摸しなされ候を時
の堂上衆歌も候ひし故是れ近江八景と申ものに候夫よ
りこの方国郡ハ扱おる当時大名旗本衆中の別墅山莊等
に八景のなきは一処もなきゆゑに成り来りこゝかして
より詩歌心得候者ハこの詩歌望まれ候異国にて八景
と名つけ候に十七二十も候ハつに限るへからぬ事或ハ
詠と云ひ或は勝と云ひ境と云ひ絶と云ふか如き其名も
数も定まらぬと勿論に候然るに本邦の世俗景として夜
雨秋月ならぬなく飯帆落雁ならぬなく候は全くに不雅
とにや中国の人は申すに及ぼす朝鮮の者の見及ひ候て
といかに日本の景はみるゝ 蒲湘の奴隷に候たと申

はこり候へく候かこれふより老拙は若きより其詩な
く候云々と洞巖に物語れりと云ん

○雲泉山人の逸事

南宗派の画家雲泉山人の始めて我北越に来るや卷驛館
某氏に寓す一日某と近郊に遊ひ弥彦山を望む彦山卷驛
を距る三里余程淡靄濛朧として終かに山の大体を觀る
のみなりしに雲泉遙かに山上を指し某の佃所ハ必らず
溪聲をらん某処ハ廟堂をらん某処ハ村落あらんと一
々指點セリ某來た信セ了其翌日兩人相伴ふて山に登り
往きて之を試みしに其指點セし処に一も差ふなかりし
と云ふ古人稱を画を能くするものハ胸中常に山岳を蘊
むと果して信なるかと雲嶺雜記中に見はたり

○題自在の発句

むらし或る公卿か山崎宗鑑に向はせられ予ハ何にても
附く下の句を案したりとぞいふ歌ハ昔しなりけりとい
ふのハ何りかといひし時宗鑑か君方にハ然もあつべ
し併かし下方てハ夫れよりも夫に附けても金の欲さよ
と申した方が然らんと而著へせし昔物語りと似たるは
予は好て点取発句をぬるか先のこけたる竹火箸といふ
は何を附ても附く雁鳴やても時雨もやても五月もや
ても秋もやても五点を外した事はないと誇り鱒にいふ
と夫も宜いふ僕ハ君程の風流心な薄いから俗分りに着
替し入れぬ船の中ハトウダ是も青柳ても涼しやても雁
啼やても鴨もやても名月やても甘く附く是れも五点の

價かあらと語りたり

○画家の困難

聞く画法に写取写意の別あり先づ取を写し工みを極め
て而る後意を写せば可なり写取巧みならされハ遂に
能く意を写す能ハざるなり昔し一豪高あり例に依り十
月夷講を祝ふて一家團樂上下相歡人々盛饗を張り歌舞
興を添へ親族知己悉く招きに應じて集る客中一画工あ
り主人命して宴乐の図を画かしむ翌日画成て携へ来り
主人に示したれば淡彩写意にて耳目も具らさる画なれ
は主人甚た楽しまふ令嬢あり来りて之れを見れば同じ
く鼻も眉もなま混沌然たる醜態なれば遂に声を揚げて
哭泣するに至る番頭の顔ハヒヨフトコ然たり下女の面

ハ鍋蓋然たり其他親族知己一も端莊なる者あければ皆
々激怒画を裂て追出し遂に義絶に及び而方救解すれと
も遂小和平に復せさりしと云ふ之に反して又た一奇談
あり福田半番か根岸小居りし頃また半髪なりしかは諸
候へ出入するには囚頭ならされは画師にハ不都合なれ
は剃髪せんと思ひしか俗態の肖像を残して後に傳へん
と欲し先づ武清に肖像を画かしめたり然れとも意に満
たさる如ありによりて椿山に請ふて寫さしめたり高久
隆古此事を聞て必ず我にも請ふる一し其時ハ他の意に
投する如くせんと思ひたりしに案に違はす椿山の画
も意に満たすとして更らに隆古に頼みたり隆古其意を察
して少しく美貌に画さしかは半番大に喜んで速かに髪

と剃たりとか人情斯くも有るへきと左から真に違ふて
ハ復た后世に傳ふも益なきに似たり画家の困難想ふべ
きなり

○碁盤の富士

浅草御蔭前に住居せる碁客太田雄藏氏ハ中古の打人と
言れたる人也一年鎌倉見物に赴き建長寺へ至りし時昏
院で碁を打音の聞江けれハ好の道とて案外者も構は
可知らず庭に深入し頻りに昏院の囲碁を見て居た
るを住主が見咎め小姓を呼ひてアノ人ハと問ひたるに
則ち見物の人なり追返し申べしと起まくするを止め御
見物の人ならは苦しうないと言つ、座を起れ御客お前
ハ碁か御好かねと言はれて雄藏も驚ろき至て碁か好て

ごかい升のて我しらす御庭へ深入を致して相済みませ
人偏一に御勅辨を否と其御斟酌に及ばん爰へ来て見
物を成さし此に々も御客たか遠慮なく御上り有難ござ
り升と恐るゝ椽例に上りて見物をして看るに忽ち
して一組(二番)の勝負を終りたり其時一人の客僧は餘程
碁天狗と見は足下も好なら一番教進せ様一向下手ご
さい升か御相手を致させると客僧と雄蔵先生と碁を圍
み始めたるに忽ちへ劫か出来るので客僧は困り果亦劫
ふね何うも劫にハ弱ちと天窓を割って考へ居たるに雄
蔵ハ莞尔り笑み和尚様夫ちやア劫を止めませうから碁
盤を貴僧の方へ向けて御覽遊はせ富士の山か出来て君
り升と碁盤を逆に振り向けたるに果して白石で富士の

山の様な形ちか出来居りしといふ

○画龍点睛

石佛に魂を入れ画龍に睛を点し一日一筆死活自在の伎
倆を有して造化の秘法を偷む美術家の意匠も亦不可思
議なるか昔し浪華にて各画会のありし砌已れに獨得
の伎倆なく祖先の死法を墨守してあたは縮地に高價の
繪具を塗抹しぬる各画伯か當時日の出画家今日ふてハ
美術の神とも崇むへき丸山應舉の名声を悪み何とかし
て彼を悩まし鼻柱と挫しき異人すと豫て申合しつゝ一
枚の素練に各画伯か畢生の腕を揮ひつゝ月に秋草の團
と極彩色にて細密に描き尽くし厘毛の筆を客るへき餘
地なきと應舉に示し如何小我々共の寄合昏れハ君に

し一筆望ましとありしに應舉ハ其意を得暫く沈吟しつゝありしか頓て金粉を撮まみ振り掛くよと見しに月輝き露映つり草戦き風香りて全幅忽地に活動したるに皆々舌を捲き儲ても人の伎倆にハ限りなきもの哉逆も君の天才に及はしとて益々應舉を尊ひけるとるん

○晋其角の逸事

晋子其角ハ豪放磊落の遺才にて一代の俳諧雄健奇放妙想天外より来りて端倪すへららず或時師巴蕉翁カ某候の需に應じて一軸の画に「白露をこほさぬ萩のうねりか」と賛をちせしに其後其角某候の許に至り件の一軸を見て何の会釋もなく「白露を」と入筆しければ某候以ての外に憤り師を惡にしたるものとして旦一戒め且

つ翁に告げけらに翁ハ怒れる色もなく流石は其角なりとて「上五文字ハ晋子其角の名吟」と加筆し今に某候の許に「及古の一軸」と称し秘藏しあるよし蓋し句は云に言はず言ハさるに云ふも申一月影をといハは白露を宿せること言はずと明らけく又月影と直せし計にて之に伴しぬる情景も想像せられ首尾活動するに至る所謂一句に百界千如を具し一莖艸を拈りて丈六の金身に化するものならん

○宮家の縁談昏

蜀山人の一話一言中に宮家より有馬家へ縁談昏なりとて記載せるものあり上下隔絶の往時に在りて文昏往復の体裁等今日より見るときは往々絶倒すへきものあり

て亦た當時の状想像に堪ふるかま、左ふ抄出す
有馬中務太輔と申男へ豊興官縁談の議雖非本意取組
候此段可相達候已上

京極宮

関東公方へ

関東代官依頼非本意候得共有馬中務太輔と申男
豊興官縁談之儀為取組候趣可被心得候以上

京極宮

有馬玄蕃頭へ

街口上

中務太輔申上候姫宮様へ結納御祝儀致進上候後久敷
日出度奉存候此段宜しく被仰上可被下候

十三

○昔時の宴會

有馬中務太輔より

豊太閤の頃振尾雲州の家老に松田左近といふ勇者あり
此人武名隠れなき者なりければ當時諸將皆な愛好の交
りと為せり就中福嶋正則ハ最親交の間柄なりし加一年
雲州か参勤するに當り左近と率ゐて上京せりと聞き正
則ハ早速に其旅宿を訪ハせられたり左近自ら出迎ひ上
座に請し深く態々の訪問を謝し正則も久々の面会を喜
ひ夫れより通一戦場の物語りに時を移し臈て左近ハ小
姓ヲ呼ひ大守偶々の御入来ゆゑ何ハ無とも粗酒一献参
らせんと存せり酒を買ふて参れとて腰なる燧袋より錢
を出し大守か一杯我等か一杯尚捧ける亦賜ハると段々

杯の数を算へ凡そ十五六杯分求め参れと命したるに正
則之を聞き側らより小姓を呼び留めイヤ左近今日ハ自
分ハ二ツ飲候へは充分なり餘計求るには及はぬと仰せ
られたりとか正則ハ藝洲に於て三十五万石を領し左近
も堀尾十八万石の家老職にしてともに当時上流社会の
地位に在る人々にして其宴徳の質素簡樸なる如此して
れ方今朝野紳士間の饗宴の驕奢風を成すに比せば天
壤月露の差ありと謂ふ可し

○俳句の批評

俳諧の詞ハ怪しい、とも其妙趣ハ詩歌と一様なり
津坂東陽の夜航餘話に俳句を詩に比らへて批評した
る條あり面白ければこゝに抄録せしめ

俳諧の発句に、花みせたはと隣一も落葉か、此句を詠せ
しものハかならず我人の隔あし、意地わろき人なるハ
し、風止て隣へもとす柳うれ、といへる人溫柔敦厚の旨
にかゝひていと殊勝なる善人と思ゆ、凡雅ハ理外の物な
りとゆめくさもしきとはいふ一からず、藏りて日あた
りもよし冬至極、といひけるハ、歳たてる力やあくて菊畑
といへるの凡流にして趣あるに志うす詩歌にも此訣を
志らべし、あなかに新しく巧ならんと考れば人からを
そこなへるをいひ出るものそかし

二三枚絵馬見てはる、時雨なれ、此句盛唐の詩に似たり
田舎の路にて志くれにあひあたりの叢祠へ走り入て、避
けらに神さひたる森の木々の葉ことに打觸てはら

とふり過る音のた、ならぬ風情ありを説破らしめて
言外に其意をふくみたり、走りつくねに日のもろきくれ
かた、これハ杜工部王右丞との律詩におさく、方らず
さはかりけハしき変化の機をわつかの文字によくいひ
かな一なり、突はれた今うれし初志くれといふに至てハ
宋人の詩に似たりた、に巧を求めて餘味なし今に兩の
音する何の趣かあらん、負おしみの俗情迄あらはれて淺
まし、淵にゆく路から細し鹿の声は、あらはにして淺く
俗なり弄巧成拙といふ一し鹿の声かすかに二日月叔か
なはよく婉にして章を成たり渾然として自然に趣深し
是れまた晚唐盛唐の風調なり

しき野調なるを、何事もなきをたからに歳の暮と直しけ
るハ詞めてたく調高し宋の王仲至か日斜奏罷長楊賦を
王荆公奏賦長楊罷と改められ呂格けたかく立あかれり
かろ中一に篇成て語を練か一し点化の工夫を尽すへ
きなり

○白氏文集

いに七一白氏文集盛に行ハれて苟くも文字にたすさハ
るもの此集に夢寐せざるはなかりけれハうたの詞に取
用たるおほかり後京極殿のおほよへき袖こそをけれ世
の中に貧乏氏の冬の夜は、とよみ及ふハ乐天京尹た
りし時に新製綾襖感而有詠水波文襖造新成綾軟綿勻温
復軽百姓多寒無可救一身獨暖亦何情心中為念農桑苦耳

裏如飢凍声争得大裘長万丈為君都盖洛陽城といへり
に本つきたるなり法性寺殿のさきしより散らつるまで
みしほとに花のもとにて北日へにけりとよまれしは新
乐府牡丹芳に花開花落二十日一城之人皆如狂とあるに
拠たるなり是より牡丹といつか草といふれり吉水和尚
の人ことにひとつの癖あるものをわれにはゆるせ敷
島のみちハ人皆有一癖我癖在章句を和けたるなり清輔
朝臣のなからハ亦此ころやまのはれんらしと見し世
を今ハ慙しきは今既不如昔後應不如今を上下轉倒して
よみたるなり和泉式部のもろともは苔の下には朽すし
て埋もれぬ名と見るを悲しきは龍門原上土埋骨不埋名
に本つく大江千里の月見れば千々に物こそ悲しけれ我

身ひとつの秋にハあらねとハ燕子樓中霜月夜秋来只為
一人長をとりたるなり俊成卿のむかしおまふ草のいほ
りの夜の雨に涙なそへぞ山ほと、さびハ廬山夜雨草庵
中をふさへていハ一り定家卿旅宿夜雨にたひ衣ぬくやた
まの緒よるの雨袖にみたれて夢もむすはるハ旅館無人
暮兩魂を愁たるなり其餘悉く挙るにいとまあらすその
かみ単に文集といふハ白氏の集をいハり山といハは比
叡寺といふハ三井のごとくになんありける

○初進の俳諧師

夏月といハる題にて俳諧の登句をせしに初進の人なり
けるか蚊をいとひなからびはとる夕月夜と口すさひた
り字匠賞美セハかは喜色眉目にあふれぬ斜抱雲和深見

月と申詞も一れの琵琶とると抱と改ためらるれハ一
段凡情深かるへきにやと申けれハ其人慨然としていぶ
かりたくとハ攀のほる義にやと問けりもとの意ハ枇杷
をりさりと採といへり琵琶を把にてハなかりしるり一
塵みなくつくとふき出せりとるん

○本田正卿の機鋒

肥後の本田正卿天才俊逸にして詩を為る敏絶一揮數十
篇人その鋒に櫻るものなし長崎に遊ふとき佐賀学館に
過く諸生その驕傲なるを聞きこれを挫かんと謀り頼め
腹稿を具し生を邀て即席詩を贈り和を要むその和成る
におよひ更にまた次韻して再和を請へ必らず詞鋒とし
て鈍からしめんと欲す生箋を見て意を領し筆を揮ふ飛

か如し暗思と構せり又手撃鉢凡生兩集衆みな瞠若とし
て自失し更に画手を延き画を作り題を乞ふ生きた画を
得れハ從て題し多々益々辨了既にして舌戰智を闘し詞
辨注射務て壓倒せんと欲す生機鋒捷給八面敵を受け遊
刃餘あり諸生終に克と能はり因て詰て曰く貴藩儉素と
尚ひ夫の禪帯のごときハ奉国必らず越中禪なるものを
用といへり聞く越中禪ハ国初三斎公の創製する所なる
か故に名くと密に推ふ不浄の具敢て君侯の符を冒すハ
臣たるもの、避さるべからざる処なり責藩人ハ何の名
を以て之に易らる、や若し他邦人に向は、或は寡君禪
と称せられんか生笑て曰く僕も亦諸君に問む世俗のい
へよる肥前瘡なるものハ多く卑賤のもの、患る処あり

然れとも士大夫も動もすれば傳染するを免れず即ち坐
中諸君も其痕あるものあり世に傳ふ此瘡初め貴国より
始めて行なはる故に其号に因て名と為すと諸君内に在
とさか何と呼ぶや異邦の人には徹色瘡といはるべき
か一塵其機警に服し再ひ敢て嘲謔するものなかりしと
いふ秦必天を談し吳容辟易す正卿の機鋒之に庶幾と謂
へし

○老鉄画史の小話

老鉄画史の尾張國名古屋の人長福寺(俗にセツ寺と稱ふ)
寺の蘆の丸屋に住み赤貧洗ふか如く居るに席なく寝る
に衾なしされとも翁ハ一向頓着せず箒硯をもて妻子と
し常に陰然として乐み興至れば瓢を鼓ち賤か伏屋に月

もさか見われ葉蘭の花もさくとを謡ひたりし
画下の壁に月樵の画きたる鯉魚の幅を貼く常に門人に
謂りて云ふ僕か亦氣ハ画下の鯉魚なりと画いても及
はぬと歎息したり

長福寺の境内に稲荷屋と云ふ料理屋あり主人翁の奇人
にして寒貧なるを憐み屢々酒肴を贈るに徳利小皿小鉢
の類常に返したる事なし如何なされしと問へばアレは
米屋のか借金の形にと無理に持て生き居りしとて喙然
として笑ふ主人も度々の事なれハ大に之を苦し廿一日
大海蟹を繩に括り之を贈るに翁嘻々謝し云ふ今日の賜
ハ實に千金にも優るへし他日何かお礼の品を参らすへ
し先夫迄の証拠に何か差上げ置くへしとして四邊を見廻

し即て一扇を取り出し是ハ門人某が預け行再た品を
れハ他日御礼の品を造したる時戻し玉はれとて渡した
るに主人も可笑く先づ聞き之を見れハ瘦竹戦凡の図
真に有聲の画なり然らば夫までお預り申さんとして持飯
りしか五六日を閱て翁半天余の狸々蟹跳躑躅たる者一
雙を両手に掲み遽然しく来りて云ふ様今日ハ先日約束
の御礼を造するなり尤も扇ハ門人に貰ひ受たれハ御返
にハ及はずとさも快然に与一去りしといふ
ある冬友人某より此嚴寒に翁ハさこそ堪かたからめと
て炭三俵を贈りしかけ大に喜こひ庭前に三俵の炭を積
み之に火を移し大氣盛んある時掌を拍て曰くア、今日
ハ百万兩の人となりたりと

○滑勢の清歌 滑勢の部下

細川兵部大輔藤孝丹後国宮津城に居りける卯り一日白
杖と云ふ所に鷹狩に出たりしに土民一畚を竹に狭み
て踏傍に建て置きぬ藤孝從者を召し其上畚を北方へと
披き見れば内に數行の文字あり曰く

一 迷惑仕るかにかゝりき侍仕置にて散く香く
言語同断六月の早にハ七貧乏をか、け鉢をひらく凡
情國ハ勤忍なるやうに十かになしとも仰せ付られ下
さるへし

とあり藤孝之れを見て打ち笑ひ從者の中閑雪と云へる
僧を召し筆を執らせ自ら口説し其の答を左の如く認
めさせ元との竹に挿み立去れりと

十分の世の中にぐせことを申す百姓をハ幡聞くま
いと思へとも七生よりちぐせも無きは地下の習ひ獄
門に懸るか繕りて腹をいんと思へとも山林に隠れぬ
れハにくき仕方を引加へて一命を許す者也

○文人の洒落

文政天保の時代江戸に櫻間青崖と云へる画人あり獨り
清貧を守り妻もなけれは元より子もなし只常に一瓢半
勺の酒あるのみ雨降れば片手に傘を持ち隻手に筆をも
ち揮毫する位の破屋に住みたるか友人渡辺華山ハ専ら
其画を賞し山水に於てハ余ハ遠く青崖に及ばずと常に
門人に言入りたりとそある日椿山(華山門人)青崖前を訪
ひしに門戸を閉ぢたれとも舟に物着する故椿山試に戸

外より声をかくれハ翁白から今日ハ留守なりと答ふ椿
山に訝り其お声ハ翁をらすや何故留守とハのたまふそ
と言ひけれハ翁笑つて外の洗濯物ハ乾きしやと云ふに
椿山見れハ破れたる単衣の軒先ハ曝しあり乃ち乾きた
る由を答ふるに翁曰く然らば在宿あり序に携へ来れよ
と椿山即ち其単衣を携へて戸を開て入ハ翁ハ裸體にて兩
手に前を掩ひ失敬々々といそかしく単衣ひきかけ應接
せりと云ふ又た天保弘化の頃梅逸門人ハ老鉄と云ひし
画人あり此人天粟物に傾着せり家にすこしの貯なく四
方八方に負債あり故に其門を閉ぢ自身ハ犬潜りより匍
匐して出入するを常とす一日途上友人三四名に逢ひし
に老鐵是れハ諸君幸ひの所てお目にかゝりたり明日は

蕎麦を呈する故諸君朝餐前より訪ひ来たまへと諸友回
より其意を知る故妙を奉と云ふとい思へとも明朝翁の
家を訪ひしに翁ハ種々の談話のみにて更に蕎麦と出さ
振子も亦く便々として正午迄に至る其内翁ハ何れか一
他出せしか暫くありて翁故り来り續いて迹より蕎麦屋
ハ大平を載せたる廣蓋を持ち来り空服に耐へさる諸
君ハ早く其大平とと請ふに翁ハ遠て其蓋を仰へ諸君
に御詫申すとあり実ハ今朝蕎麦を遊せんと言ひしハ此
にある春を今朝頼み主が請取に来る筈なれハ其謝金と
以て蕎麦を呈する筈なりしか其人今以て来らぬ故已む
と得ず蕎麦湯を貰ひ来れるなり何卒今日ハ是れにて勤
辨されよと云ふにそ一同ハ惘然たれとは非ざるく名々

蕎麦湯を啜りて苦笑ひて飯れり

○尾上菊五郎の逸事

当時梨園社會に在て世話狂言に妙技の聞えある尾上菊
五郎の若かりし頃其名を市村家橋と云ふて深く浄瑠理
と好みむも美声なりければ豊竹古靱太夫と師とし切り
に浄瑠理の藝古を為せしか或日劇場開始の前日の事な
りき家橋ハ臺詞の昏抜を打ち擴ろけ几案に對し來もて
頻りに句讀を附け言ひ廻ハしの工風をしてありける如
一其師古靱太夫尋ね来り其体を見て痛く業務に精勵る
るを嘆賞し且云ふ振句讀の事に付て一の佳話こそあれ
我か壯年の頃師の靱太夫一日自宅にて浄瑠理の抜本に
句讀を付し居たりしに平生心易き近邊の珠數鋪の手代

・折節尋ね来り師が句讀を附けつ、あるを見て嘲笑ひ
師の当時名ある浄瑠璃の太夫に在りたり新孫の小児
臭き業は似合はしからず其程の事ハ夙に諳んし居らる
べきに扱々御記臆の悪き事かす斯くては未だ名人と
ハ言かたしと口賢なくも嘲り切つて飯りたるか四五日
経て師の勅太夫ハ右の珠数鋪へ平假名交りの番状を遣
はし珠数を注文せりか日を経て出来上りしこと待来り
しを師ハ見て是れハ我注文に違へり曩きに我か注文せ
しハ斯様にならざるのに非ず此の三つ一つも小さき珠
数にて在りき斯様に大ききものにてハ用に立たずと推
し返しけるに珠数鋪の手代之れを聞て珠の外憤り急ぎ
注文番を持参して師が許に到り太夫能く見られよ此注

文番には明らかに「二ツに折てくハにかけ候珠数」とあ
るに非らずやと然るを何故注文違ひと云はる、やと詰
れば勅太夫ハ坐を正し告へて言へる孫御辺の此文をく
ハにかけ候珠数と讀まれしは誤りありこれ必竟句讀の
なきか爲めなり先日御辺か尋ねられたる仰り句讀を付
するハ餘計の業なり杯嘲られしか予か注文せりハてく
ハにかけ候珠数にてあるを句讀のなき爲めに斯く讀語
られしハ御免の毒なから之れにても人の事は容易に笑
ハれぬ物なるを知り給へと諭され手代ハ今更らに面目
なく冷汗を流し只管陳謝し逃るか如く退りしとるん
○惟然坊の洒落
惟然坊は蓬門に遊遊して俳諧の狂人と称せらる行脚し

て播州姫路に至りけり時或る人其裾衣而結身を掩はさ
るを見て布一疋を恵みけれ惟然坊火にまろこひ其夜
旅店に就て布を出しこれにて着物一つ縫てとらせよ
り賃に与へんと云に女房速かに諾かひ其夜の内に縫
あけて進めつ惟然坊翌朝起出て、新衣を着けたりしか
家ヤカ又垢附たる古衣と着替新衣を携へて恵まれし家に
至り新しきものは着て、ろわろし依りてかへし参らる
るなりと云つ、投げ入れて跡をも見すして去る又濃州
に遊ひし頃ある俳家に宿りて朝早く暇をも告げし出行
さしか跡にて見れ惟然坊が寤たる室の衣桁に掛け置
たる振袖一つ紛失たりけれはさて、彼坊の盗み去りた
るならんと下婢走り入て主人に告げ、るに主人打笑ひ

て惟然坊の人の物なご取る人に非らず故こそあるへけ
れとて即ら行たる先へ人をやりて問しめけれ、今朝早
く立出たるに野風寒かりけれは着て来たりしなりと何
気なく返したりまた江戸に在りて心地例るらず引籠り
て居し頃或る人今夜誰家に俳諧あり行きて見よと誘ひ
けれは惟然坊うち笑ひ日出て、起り没て息ふ行住座臥
皆余か俳諧あり又此外にならずへき俳諧ありと言へりと
を奇人と言ふ一し

○古文の簡潔

文の簡約を貴ぶ所以のものは讀者をして文意を了解せ
しむるの苦を省くに最も必要なりか故なり昔時羅馬の
シーザルが「ポンタス」を伐ちてつアルナセスを降したる

とき或人に其戦勝の状を報して曰く「我は来れ我ハ觀たり我ハ勝てり」と詞簡にして能く尽せりと謂ふ可し我邦古文中亦た妙品なきに非ず大坂の役徳川家の臣にて鬼作左と呼ばれし本多作左エ門重次が江戸の室家に贈れる手紙の文にいふ

一筆申おさん啼すな馬肥せ

おさんハ其女の名なり此啼すなにて父子の情を表し馬肥せにて武士の真面目を顯したり近古史談には盤庚翁之を譯して寄一筆慎於火何仙不可瘡馬可肥とあり余見たるは翠環録なるか火の用心の事なく阿仙もおさんとありたれば右の如く記したり是は鬼も角も簡短にして其意を尽せりといふ一し又徳川家始めて今川家の領地

を治むる時屢々奉行を遣りしも治め難きにより此重次を向けられしに重次其地に到り高れを作り大昏して曰く

人を殺せば命ハないぞ

火をつくれハ火災に成る

狼藉をせば作左叱るぞ

此高れを建けるに其後は能治りけるこそ是ハ法を三章に約したりとも云ふへし文ハ俗なれとも其効殊に大なり又箱根権現の什物の中に此條時宗の昏簡あり

昨夜隣火忽消貴寺安穩珍重候

時宗

近火見舞の文此にて尽せり昆陽漫録に公私雜翰を引て足利氏か琉球國への返翰を載す

文くわしく見中の志人上物たしかにうけとりぬめ
てたくり

永享十一年

御印判

りうきう回のよのよし

御印判とあるは義教公の御印なるべしとあり又世の名
文と称する馬喰亀か金三両馬代云々の文ハ曾つて本欄
に登載したることあれは此に掲けず又昔し一休禪師紫
野に在りし頃人の唇を求むことあれは長き文を唇与へ
たることおみく僅に御用心の三字を唇して与へぬ強て他
の言を求む者あれハ御用心と幾回も唇き又は上に
只と云ふ一字を割へて只御用心と唇与へたりとかや詢
に善き教訓と云ふ可し又或人有名の文章家に向ひ一筆

啓上金を貸せなくてならぬ恐惶謹言と唇きたる手簡を
示し極めて妙なる唇態ならすやと云ひたれは文章家は
尚ほ文勢の緩なる所ありなくてならぬの六字を削りて
一筆啓上金を貸せ恐惶謹言とせば百尺竿頭一步を進め
たりとも云へく真に妙文ならんと言ひたりとそ

○蜀山人の壁唇

太田章ハ其号を南畝といひ蜀山人といひ又寝慵子とも
竹羅山人ともいひ狂歌狂詩に巧みにして其雷名海内
聞へける其唇齋の壁唇に

年頃吾か唇を請ふもの多し扇子團扇扇額屏風服紗唐
紙和唐紙いやな羽織の胴裏に至るまで累々として果
しなけれハ吾其の請ふものふるさきによりて上中

下の品を定む止ハ速かに昏へし中ハ預り置て昏へし
下に至りてハ昏へからず若し聞かすしてあつけ置て
のあらハ扇ハ嵐の吹むに任せ紙ハ反古堆中に沈めて
永劫浮ぶ漸なるるし

上の部

一詩歌の心をも辨へたる人 一詩歌の心ハ知らねと
も甚はた是を信じてたくは置く人 一名人の画の讚
一表装至つて美にて掛ちのとする人 一美人の直頼
人傳つての依頼にてハ受とらる

中の部

一詩歌の好なく何にてもよろしきといふ人 一人に
造るにてもなく自おさめおくとりふ人 一扇一二本

短冊二三枚唐紙一二枚好む人

下の部

一悪画悪紙和唐紙を辨へざる人 一遠國へ迄々旅立
人に贈るといふ人 一小者の價ひ高ければ扇にか、
せてやるか徳用といふ人 一何か一向わからねとも
昏せて置くか徳と心得てむせうにか、せる人此類婦
人に至て多し 一筋違御門外の古道具屋山下あたり
一賣る人

此外ハいやを事たらけにして見る目もろろさき事多
しあたし先陰を費やして慾深き者の目を悦はしむる
に忍びず仍て壁昏如件

○大雅の逸事

大雅翁津華に至るととき大和屋某暖簾に屋号と春人ことを請われ華を執りて先づ大和の二字を作り忽ち華を投して立ち出たり主人は廁にても上りたるならんと思ひ居りしに時を經れとも故らざるにそ不審に思ひ居たるに数日の后つと未れざるをもて主人怪むて問へば答曰華を下すの際大和の二字につぎ忽ち吉野の櫻花正に盛んなりんと思ひゆき直ちに同所に至りしに幸に満開なりきと最も平氣に答へぬて前の約束を果すへしと復華を執りて屋の字を書き添たりとるん又或るとき翁妻の玉潤と共に天の橋立を觀て若狭國へ向ふとき馬丁の馬を勸むるに任かせ夫婦合乘にて華鶴港竹屋町壺屋某の宅の前に乗り馬より下るととき馬丁賃錢を乞へば一錢の

貯ひもろし馬丁大に怒り強て之を求むるに夫婦如何とも為ん術なく幾人と困却せし折壺屋の主人之れを見ていと死に毒に思ひ且高名なり大雅夫婦なりことを知りしめから其賃錢を拂ひ己か家に滞在せしめ厚く遇したりと云ふ又翁の逸事を近世崎人傳に載て曰く或る富豪翁に画を托したるに月日を經て果さず使至る毎に近日とのみいふ一日童僕例の如く来るに尚画かされば門を出るより獨り罵りて北死画師人を勞するを幾度其れ自負か情か人を侮るかといへるを聞て急に走りて引止め君かいふ所甚いた理なり吾過てり吾過てりとして直に華を染めて与へたり又曰く一春林の僕主の金を使つて遊興し放逐にあひ他國へ行かんとするとき道人のもと

一来りて別を告ぐる道人甚だ構み我主人に詫ひんといひて持てるれの昏画調度を賣りて其金を價ひ飯多せしめたり又曰く大雅石刻の十三経を得んとて年比心に懸けしかは貯ふるれの錢石貫に及へりしに賣尚售らす嘆息して其錢を祇園の社に奉納す時に御社修造の事あれは右り其時のさよ蒙庭の大なる蒙に巴を画き神輿の紋なり拾貫文つ、十にして門人と、もに礼服を着し青竹の構もてさし荷へり社主其名を掲げんとせしを固く辞されと誰ともなくしいあるへからずとて玉潤としりせりも又曰く大雅極つて貧しけれとも画の謝金を持来りし手にて受取りしをかし入口に水瓶を置て其巾へ入れ給へと云へり又米薪の價を乞もの来れハ其水瓶の中よ

り持て行かれよと云ふ其人水を探て無き由告くると云ハ又来て次に探られよと云ふ

信長の亡骸

信長記に本能寺兵乱の後公の亡骸を求めしより更に更に見
えたる趣を載せ信長誘ふる事幕内飛助其真衣を白
て先考の示しなど猶訝りしと記す然るに洛中京極
通鞍馬口の南蓮堂山阿彌陀寺に信長信忠父子及戦
没の従士数輩の墓あり如何なる由縁もやと思ひ
しに頃日某其寺の記録を讀む當時の状を詳し
を得たり此記のまじき所を遍く流傳せよん其大要
を抄録す

記云、抑信長公阿彌陀寺に於て由緒深き事ありを委
尋するに信長公御存生の内當時用山清玉上人一名和清
ヲ蒙り朝巻以後公の恩顧年来御別懇ニ御目を懸かせ

テ谷土朝巻以後公の恩顧年來御別懇ニ御目を懸かせ

ふし事世に隠れなき事にも有し也然るに明徳元秀か
謀叛を依りて天正十年六月二日拂曉御旅館本能寺に揮
等七合戦に及友軍早速清王上人聞ッテ大に驚き手
前の坊主並に塔頭僧徒二十人計召連れ不取敢懸付
申されしに表門合壁の軍勢より中より言付事叶ひ難く
見へしに表道へ廻り垣を壊て寺内へ入りしに景子旅
館へ火懸り信長公御切腹おされ候と少し力を夜
し片脇を見えんけん墓の後ろ敷く由り十八段
折高卒塔婆體の物折る火を焚あり上人立寄り
見玉いしに皆知る武士也是はいひて信長公の如
あらもおりしものと問玉いけん景子切腹おされ
御遺言を死骸を取らす不首を返すると仰置

九夜然るも御死骸を抱て立退申へきも四方皆敵也
はあり致すなき思ふも無く故よりとらふは
御火葬せし致し伏して敵を隠し我々の其後切腹化
御供申候いと存候と各一回に答ける上人されし事
の事也此は他人御存候通書事申候事の上意に
預り難有く存候し事あるか何かの御用も有えと
存あり是れも御存候事なり御生宣是れに不及
貴火葬の出家の役あるか爰を御存候御後ある火
葬の御骨を我寺に持帰御墓を築き御結事
等も御存候の力程お勤申へしと友言御氣を
各一働ありて速く打死し御供ある候と申玉へ
皆し候と思召玉に候に存候然るに貴僧の爰を八頼重

猶入来る敵を防ぎ心静に切腹し御供仕らんと志、
出らんし御上人勢の煙と云御骨を元集の衣、
つゝ又本徳寺の徳の志思と風情して阿彌陀寺に收
らん御骨を深く隠し一日教至り塔額の徳徳計
るに茲に御葬所をいひ御墓を築き終らぬ根元
の御墓に阿彌陀寺うんわらまらまらん
中余日懈
急をくお勤奉りの也

阿彌陀寺義行長公御墓所に紛らるゝか不と由
結らしき事：御骨をくふ公儀もも蔵の御家門
よも一向の御持らるゝゆこの寺に無くて数年
を送り悲歎を枕らるゝ細有る事：其其子細
と申ハ羽柴汎前寺秀吉、昭留を打亡し天下の武伯

と云う玉ひ世の中大方静りし位行長公の御葬所を
事よりし御存候寺にて御法事執行あるべき事
仰出らん後不浄玉上人御骨を千前より御法事も
お座らざるを及申す事と御受申さん
お此より依り秀吉公より御位牌前長日佛餉料として
三万石の御朱印を下らん後不浄上人地も受申さん
御骨を法師の左の地の地行受らても所用無之及、
御余日長日の執行の地方もお座らざるを及
内申さん後不浄秀吉公の仰より及らるゝ代御廟
所お績の為として上使を以三度まじ御朱印下らん
は以上人お受らるゝ押返らん後不浄秀吉公大い御立
候らるゝ向候其寺より自らも勿海縁の家門共

構ひ七不申外、寺を建立改寺領を付何れも夫へ奉
詣可申後、夫も三申さすやと仰せ、及時夫は御
勝手次第と上人より奉申されし故、秀孝公禁野大徳
寺境内、惣見院と云一宇御建立ありと右の御朱
印被守、仰付ある御法事執行御奉詣有しよ
緋田家ありとも公儀を仰り、吉寺す、御持もさ
大切す、御所も一向縁に在り

右ハ清王上人深き為方、数度上使を拜して、其
二背ふは其存念と申ハ秀孝公天下の氣を治む
ハ長公の御子孫持の又ハ御建敷方を武ゆる傍、
自ハ執権をささん國土を御治め、道の道なる可
し、然るに長公不慮、御生実お下さんなるを孝

ハ莫大の重恩を蒙り天下を我物として、緋田家御家門
を御家頼とささん為事、上人其本意さす、念念
ん秀孝公の事を考へ、人びとの人非人との事申さん
由若し、亂由御家門の天下を御朱印頂戴あり、上
人、存く御受あるべきを不我不道と云ん人より
願く、如の持、事なりとも、予より、き心、慮も、右の侍、
及申後、

此代猶敷條あり、只亡骸埋葬の関、
みを扱ひ、生す、不記、
日之類、
檀中之内、古先共之、
如終を、
享年保十二年

辛亥仲夏廿七日第口世幸登説書とあり右文
記素朴にして潤飾なきを身の余の塔の状の極
家古天竺傳の序を記せる者なりと説き可し
或は採て史料の定ることも（中村清延）

○高治高尾

岩瀬百樹の歴と女姓を乃に引く三浦尾と二代目の
高尾あり是を高治高尾として高尾十一代中の先
妣とす其出生は下野四塩原の庄中塩釜村農夫長
助の女より高尾十一代のうち二つあり此高尾のみ世々
推稱せらるるハ一貴権の事に出づ巻傳は四高尾
或は顯る龍てらん身を賸るんなんとも節を悟人

の守りし随らず終るハ船中の名又死しとあり
固是の一文を讀み當て當て言を傳へたるを
天保十三年仲秋敵書一本を得たり高屏風
物語と題し全三卷一巻三年江戸板序文の作者ハ
願ふ事もありし時高治の四郎萬治の新藤も
友より入ハ高尾の情入りて作者もよしある人けり
事文中のミエたり一部すして古時の娼妓の書のみ
板橋雜記に似たり一部の友端に書初硯の
海のもし不料万流三年の喜のりめより終る
のハ中のありとありし全アの終るはくおもひあるもの
くせやしんもの目もあはぬものも硯を好む心
はくわくありしものも持てたりとさく書付

望むらふ事もつまじき新い愛さうけり中いみじきうら
れも高屏凡ちを折つ仕立に世をまんとと筆を
とちのなまらし書花の心も柄然らう、そそ下のまら
作者の友さう秋の菊とりし人標すは地元の高屏か
中のかろき高屏か
よひしうち高屏病死のこととたりとあのお葉書
ちりええさうとて秋の菊のまけくちん多に替かえ
れおきいづり思ふこ替とおもひやう思て女建のまら
はる十人や高徳寺とりし志やうとびり行こるんが
香をたき花をいそばきやうしんとまらふとまら
あんいと思ひのまらわきも一志ののこををつばりしな
仏前又替さくあらひんち折しとまら長き文
ありまらいたう「出と」万治二年のこし此社のまら

あしとありた昔のをもと新よいとめらと一まこれ建い
ちまらうらうらういせしまらういやまらう顔さんかま
れ事もたあつうもいそいさうあうしとまらあまら
日らうしとあうもてわくるとまらつひまあまらすのそ
めれまらう御おし十九とあうしとまらあまら
からをいしきとの袋入のあさちが原の替谷高徳寺
おさめらあういめしとん替めらとんとりし万治二年
己亥極月十一日花柳敬白とあり極月十一日高屏が
七の待たう
此文の委実とまら遊標とて三又の船中まませら
れしとて小吉末の妾説を折くべしねて又女の三谷の
高徳寺の垣一重隔く月光山春世入院る今現
にたうとる墓あり内二つらありみうけ名の四方塔

もて遊女など身もふせししぬきまもいふ
うしく且又三浦屋の甚提所も榎寺さうまたら
をいふはかくしきもいふしけの醒言傳高尾
考の心ありし頃新野野春甚改の檀家さる旧林
寺もあま内させ醒言おのまを付いて甚言の改は
布施さうししめの甚言の由縁をさるけるる住持い
ひけるやうあらう此寺も幸念佛ありしころ寺のち
うく三浦屋の別荘ありかのたを病ありて保養の
為別荘ありし頃三浦長尾とて病おこころし頃わ
らわのほ朝ありちたるかまのぬの寺くかく
しあられとの遺言さうさるこころは葬りやうし
寺説は傳へたうさの持し物さうも寺はありしと

きこしかろい一つも強りもさすわの代もさうて甚言
地四も大あめめいむくき甚言のいゆるあじさ
物指家へもんを甚言をもりのけ出を入ける時
たのさのめもりのけなま下へ不板りてありし
かやうのけつありしころ寺の寺説も傳へもさ
と甚言の甚言をせり醒言もとやありと詳論せりし
検定すべき書物もさうころお死しは甚言も一
をゆるし件の甚言の下の甚言いざせ玉へとい
もみちの茶やのしとくよと茶さびたるとい
あるトのあけいけいさとのかこの印是あも甚言
何の見取もあやもさうまのぬの寺の
し能高尾さるる冬もさうまのぬの寺の

さしちらししとあり是のうらう百年むらうまの北
廊の妓態今もかたさるるを志すくし西出ハ遊女を
ぬも髪女のふり大壮り明人田藝ハ衛ハ留青日
札六邊三姑之条下ハ大家婦女赴人筵席金玉珠翠
首飾甚多一首大鏡如金抱及上轎時鏡不能入
簾輿也(中思)坐久頭重不堪其苦眩暈扶帰とあり
さるる巴ハ遊女の二枚柳八本叙ハすくちうといふ
やし又列績ハ飛雪録ハ公鳳といふ十鳥人の馴
れもく好で物人の叙ハる集るといふりいふハも
ともとまのこもあるハ髪のかさうれ金抱あるといふ
符合せり

○十八九の女竹馬を乗る

一代女貞享三年此四十年迄まひんせの子十八九まひんせ
竹馬ののりにおび男子も言まつて廿五より元服セ
しはかくもせやいふ女ある世やとあり梅すまは
四十年迄おと貞享三年といひハ心保の詞をとし
ていひつるさる

○楊貴妃髪を截る

楊貴妃お侍る云貴妃嫉妬つらう玄宗ありきけんし
時玄宗の心をとりさるるを髪を截ていひけるや
妻かあつたある物のこのさうる人の賜さう獨りお
毛のみハ父母の賜さるまは是を奉るとて拵ハハ
玄宗貴妃の髪を截て心とけます貴妃を感
涕し

○人名の魚

江戸の海より人々の魚あり河豚の類あり鮓の鱒三八
郎といふあり所よりとる海八と稱する人もあり又海
の石また空懸といふ附きとる黒赤芝を帯びて
やうかき丸き肉あり貝の類より鹽又醬油ありと
附けし海より名料といふ是を石五左衛門といふ
所よりとる瓦子玉といふいふも瓦子玉をすき
いふめし新五左衛門といひ謗りしるも肛門より似た
る物とる人ありける又鮫の類より角兵衛といふあり
亀の類より心之坊といふあり笠子といふ魚をそ本
丹といふ名をよめり、鮓を海老、鯛をおとらとい
ふるもたまにまえり 信廟の命

○一日寺

和字解ふいと、七長法師と唐人の旅帳より一日寺
といふ一曰示るるふし、辨家と書き付けし是とく
のつくれよと通説の方、言ひおこしとるも比る、言
ひ合いて何の事ゆか令點せり、譯唐人の旅帳と
ころ、せんと書く心まわらぬありて聖廟の徳を
向井玄井の是と書きむとくと令點せり、やいふ
えくくはむと書き言井三といふ一唐言のよまは
りし、事ありんと唐言のよまはりし、事
事高みといふ一日寺といふめか日本人か子
く令點すべきと、餘り唐人の念の入り過ぎたりと
ころなる事かわしとあれども、ん七法師の書不ある

る人の一日示と書けるを見て疎しきことと思ひしるる
造語と思つる長海を唐人唐國の物件をさしするを
軍子を用ふるは唐人さうけとて是の唐言を
漢語一過し日用あるをことハ其の存所ハ物件
ことかたやたるハ翻洋してその後勤ハ出たチ唐
人すや日本唐の漢文さきことハ式ハ漢文分岐あす
又ハまさしく大いき物件を軍子使上り書載する
一之のちる余得し易うらしめ人たの唐言を以つて
日本語の漢字あり、繼子を一曰平、櫛子を加真、輕
節を要子魚、墨豆を諸々面、ふすまを司馬、
嶺を套馬、辨書を使道、重おを交百葉、といふ
類枚多きなりが、こゝの事らんからんか公點

七のこのあふらんまや云々 善齋隨筆

石田三成ハあつしげと云ふやし世人又つさう又ハあつさ
と云ふハ非也

孫吉次及び伊勢一身田の所産の三成の依元文
教通何れも依元文と云ふけと署名すと石川
之聚の伝

長曾我部ハ長曾かめと云ふべし長曾かべと云ふハ
非也

異四傳東記と云ふ長曾我部を、ちやうそかめ
と云ふ名附ありしを、あつしげし津坂孝律曰長
曾我部盛親の依元文、何れもちやうそかめ

とあり後者文のみならず其名も長曾巻と其
の字を借り月して三言始々書けるを見しこと
ありしと、鼎座するも長曾我部と長曾巻と
りふべしとへハ字先ハ字ハおみなくしと書き
しと云へハを又あめしと云ふか如し
行雄ハのぶかつと云ふのぶを云す

蘆野族上方氏の祖先ハ行雄の字先を諱の
一字を賜りて至今も歴代ありと云ふ雄の字を
用ふかと訓しをといハす

泚川一益ハいちめすと一を言ふを呼ぶかつ
まふといハす 新撰語源 (善庵伝)

○孟子

孟子ハいヌトキ書らんも日本の神の御言も今ハ
唐山より載せ来る船中ハ又ハ後へると云ふ
古くより云ハ使へる所なりと云ハ彼書の善と云ハ
利する世と云ハ七軌定る用ひせ給へりし事ハ
貞幹ハ古日記る諱る梅するも丑雜処卷四載す
後叙亦富儒書信佛法凡中四経書、皆以重信購
之獨無孟子云、有携其書往者、舟輒覆溺、此
亦一奇事也 桂林漫記

○
凡古言を辨せんと心かくることの誰の五十款の及切
よらりしを釋し得ぬや、さていへその及切ふ
つみし、あいて説を釋せんとすんか、なめくるあや

まゝ事多し、然るの爲によく其意をなせし程を
とんしをそのせし(をうけし)能くよくつづの語を
及切なるとのみ得しあし(く)得ざる、五六言
をついめて一言とす、あひて古言を釋せんとも人
あり、いみじき心かごとし、あし、翁の門人の中
狗術稱諸成、建綾をいひ、殊に及切なるかみし
幸強の決釋、おほありき、ある綾は美、あ
あいでかたし、いけるやう、おのれ久しく、露の決釋
を考く得たりしを、近は考のちうとし、宇葉伎
問ひていへく、そ、い、か、つ、釋、を、綾、を、え、へ、し、
務と陽炎と同語なり、カギの約キなり、口ヒの約
リなり、さん、カ、口、ヒ、の、約、キ、リ、え、い、か、の、七、天、地、皆

の一氣なり、同語なるあし、やと、いふ、時、宇葉伎微笑
し、や、か、て、い、く、と、い、ふ、し、が、露、の、決、釋、を、い、
て、お、の、れ、七、考、の、ち、う、し、釋、を、い、ひ、應、と、並、に、同、語、を、
綾、と、か、た、ふ、き、え、い、か、の、應、と、並、に、同、語、を、い、ふ、と、
い、ふ、と、宇葉伎ツハの約タなり、クラの約カあり、さ
ハツハクラの約タカなり、い、つ、の、も、同、じ、き、な、る、に、
同語同物なり、ことわりなり、と、あ、き、り、い、ふ、と、綾、を、卷
あ、き、詞、を、い、へ、閉、を、せ、り、と、い、ふ、譯、を、よ、き、え、と、い、ふ
へ、し、露、と、陽、炎、と、い、は、る、天、地、の、氣、を、い、は、る、と、い、ふ、
同語なり、と思ひ疑ふ、ま、あ、ら、あ、ら、あ、ら、と、並、に、と、い、
いか、同語なり、い、は、る、共、に、あ、ら、あ、ら、と、い、ふ、
あ、ら、あ、ら、あ、ら、即、ち、あ、ら、あ、ら、(指、し、節、説)

○ 羽倉在満羽倉在満 海上春望といふ題を

多しと海よりまきわたる海客の心と見ゆべき

泰山七首

此歌を真字借字をまじへていへばある葉を
うへて五七律句の詠につくまゝなり其書ける

十二首

春日遊小田原、賦得海上眺望 荷田存謙

味羨春日やあ 渡流海面波 阿波登應見

遠山難追馬

秀才おもひやるべし (全上)

○すけ人の辞世

縣長翁の門人の平高保といふ人ありけり此人常といひしハ
近來の人の辞世の歌といふものを見きくも皆禪家のことを
りといひし何と云ふ事なき聖も辞世の詩歌とたゞ
りといひし皆口きよきことのみなきいかにこの世を別るべき
ハに至りてはさる人ありてあはれ言をまらけしよみ
おたすうたこそまゝいへる心もあはれ言をつみいひぬ
そんせといかざるやあはれ言をまらぬ余をそんせきて
な臨を心もあはれ言といひせつる人なきくまなま
さしうたをいひあはれ言の見るむらう 在土中時のまのふ
けふとおもてやうしをいひて後まんとることをまこと
ふたこととあらざる人に向ひてを告ぐるかたけりか

かほてや思ひまゝけ々も、又、其をいふのぢみてや心
うめいけむ、病いとあつしうまて

我々もよをうりまゝいひ見ても

と、うくよりまもせよく見て死るを

と、うみし、ちまあうりけり、世のをねらうけむ
ことおもひやぶし 油く草花

○神功皇后挿腰の石

信宿後三海の曰く、神皇皇后紀に、于時也、適當皇后之
洲胎、皇后則取不挿腰而、祈曰、事竟日、産於茲土、
其石今在于伊都縣、適息云、葛葉の歌、
七綾の果し是媛神の尊、韓回を平たひけり、
御心を鎮の給ふと、伊取志して齋ひ給ひし、真玉子

二の石を世の人示し給ひて、葛代にひつぐがねと、海産
沖つ深江の海上の子、負の原に、御手自置し給ひし、神隨
神さひいます、奇魂、今の現る貴きろめ七、天地の友に
久しくいひつけど、この奇魂志うけらしし、この石筑
前田、怡土郡深江村子、負原海岸岡上、今もあり、美
葉集の傳る、一、一長一尺一寸六分、田一尺八寸六分、重
十八斤五兩、一、一長一尺一寸、田一尺八寸、重十六斤十兩、並
皆精山、状如鶏子云、筑前風土記に、一、一長一尺二
寸、太一尺、重廿一斤、一、一長一尺一寸、太一尺、重廿九斤、
ナ、て年ふすま、い、つぎく、る、大、き、く、さ、う、て、今、ハ、
たり、三、尺、も、あ、ま、ん、う、と、い、へ、り、大、し、あ、瑞、帯、を、挟、み
給、ひ、し、と、ま、ハ、指、頭、を、う、う、の、小、石、を、う、ん、と、年、ふ、ま、

み教とて、苔のあす、いさうぬるこもくすしく
ぬるけり

○硯を左に置く

書道院のありといふ古畫の、壁を風の像、硯を
左におけり、また明の仇英が畫帖を、硯を
凡の左に置きたるを、二ところ、三ところ畫けり、かゝる
硯を左に置く、とて思ひみたる、後傳花鏡
の花を、欵設の部、堂室坐几の條に、古人置硯俱在
左、以其墨光不閃眼、且於燈下更直といへり、され
ば古畫を、流とすべきの一なり 世事百法

○紫色

今の紫、古の紫とあらず、論語と、孟子の、紫之奪朱といふ

其色朱よりまが、あらず、今の中緋の本紅よりまが、か
とし、古の紫、和漢にも染まらば、朱とまが、さ
趙彦衛が雲林墨漫抄に、孟子云、其紫奪朱也、蓋朱與
紫相亂久矣、仁宗晩年、京師染紫、變其色、而加重、先
染而作青、後以紫草加染、謂之油紫、自後只以重色
為紫色、愈久、人愈珍之、然朱大不相類、淳熙中、北方
染紫、極鮮明、中四亦效之、目為北紫、蓋不先染青、
而改緋為脚、用紫草極少、其實復古之紫色、而誠
可奪朱、中則知古之朱、赤汁染之、紫與手實相去
不多、今之淺紫、甚似之矣、といへり、古の紫、下染、青
色を用ひず、赤汁染、緋を、其上の紫根汁を、少
しかけたる、朱の色とまが、いさう、朱を奪ふと

いづも宜らざるや 茅苴没録

○岳元四字

宋の岳元が善心報回の四字を背し、鑿りせし事人みよ
傳へりて感涙する所を山崎周言の言より淺見は
郎誦ハ此四字を自佩ふる所の刀の脛巾金きんと書き付
けり余がしる人その刀を所持する茅苴没録

○海水鹹苦の佛説

佛書ハ一向つまらぬ事のみ多し中ちゆう海水の鹹く苦き者と
同く阿含経曰、三つの因縁あり、海水の鹹苦のハ一つは
成却の時光壽天を至りし趣く大雨を降し、天宮及
び天下を洗濯す、其中諸の所穢せうの惡者あり、是の
鹹苦なる其諸の不淨の物、大海に流し入ると云

一味とす、夫故に海水ハ鹹苦、又曰、大海中有諸大身衆
生、所吐大小便利相聚為鹹苦、在ハ海の中ニ世界がある
大なる人として、其人此世界の如く衆生ありて、其人々の大
小便があつて、海の水が鹹苦とす、云々春法抄

○正宗國俊の話

鍛冶に名高きハ三條小鍛冶宗近をり彫工の甚五郎と
おしく何にても古き刀劔類と見れハ小鍛冶宗近の作と
いふ所謂祇園の薙刀鉾の長刀又北越くさり山のくさり
ハ数年経れとも朽を宗近の作と云尤も謡曲に小鍛冶有
て名高き申一然いふハ理をれとも鍛冶にも薙刀くさり
を鍛ふ事ハなるましくと思はるゝに何を見ても宗近の
作と云又をかしからまや宗近の狂言ハ神勅嫁入小鍛冶
といふあり刀鍛冶にハ古來名譽の人多けれとも新藤雪
物語の淨瑠璃に五郎兵衛正宗來國俊團九郎と共に刀を

鍛ひ國九郎湯加減を見んとて右の腕を切落され左計りにて後に打をては正宗と云ふ事を作り込しより此三人ハ名高し是に似たる話ハ四代目河内守國助代々名鍛匠の家をから知くして父國助におくれ奥義を知らむ小林伊勢守國輝に鍛練の術を學へとも湯加減の一大事ハ秘傳なれハ許さむ故に國輝に一人の娘あり容貌醜陋なるを乞受けて妻となし年月立て妻にかたるハ汝を迎へて妻とむる事かの湯加減の秘傳を知らんためと心底を明かせしかハ妻も鍛工の娘なれハ道に切なるを感じ進日一刀を鍛練して湯を渡さんとむる時我病氣瘖せし由を告げやらハ取物も取敢を来るべし其跡を伺ひたまはハ湯加減を知らん事必定なりと謀計を極めて待つ所に

何某より命せられ刀劔鍛練の事有て國助も合楯に行き頼て湯加減を渡さんとむる時國助ハ小僕走り来て家室急病瘖し絶入たま一りとして告げしかハ國輝大に驚き河内にも来れと云ひるから側に在りし一桶の水を湯舟に井と入れて走り出より國助ハ謀計破れ茫然より國輝ハ國助ハ家に至り見れハ娘ハ尋常の体なれハ子細を問ふに國助も走り来たり夫婦詞を揃へてかの湯加減の事を語り火急の期に臨んで業に切なる事を感じ其罪死に當れりと謝せしかハ國輝も父祖以来の知音といひ智勇の間柄惜むへきをならねと古も是を窺ひ片臂を打落されころもあるものをと深く秘しふれとも重々の深意を見届けられハ相傳せしむへしとて委しく傳へけるより後

國輝國助一雙の名劔を鍛ひ出せるとぞ是れ國助と國後
とし國輝を五郎兵衛正宗娘をおれんとしては正宗と
國九郎と作り設けたるものなり

○振分髪

伊達政宗或時御城へ伺候せられしに傍に有りける大名
某政宗にむかひて公の佩たまふ所の服差ハ定て正宗の
作ならんと言はれけるに仰らる、適り正宗なりと言へ
られければ某も實に然しあらんといはれけるさて政
宗飯宅せれて其家臣に申さる、ハ我今日殿中に何某々
云々と問はれける侍帶を祈の脇差ハ正宗なりと答へ
り然るに我佩る所の脇差に正宗の作なるものなし思
ふに我れ大國を領し居れば佩る如の脇差も銳利無双の

正宗の類ならんと人々常に思ひ居ると見えたり然れハ
此後とても今日のことき伺ひに逢ひ又望まれて見ん事
と乞はる、事あらんもはかりかたし又けふの昔もあれ
ハ以後乞ひ見らる、に及びて無しといはんハ我恥なり
依て貯ふる所の正宗の刀を脇差にせんともある鍛冶に
命して其刀を切つて短くせしむ鍛冶命を得ていひける
やうこは思ひもよらぬ事に侍り今仰せらる、ことく此
刀を切らハ銘の字畧なくなり侍りけるものを然かまし
給ふハいと歎かほしき事に侍れハまけてと、有り給へ
と諫む家臣等も共に諫むれとも政宗聴かむよりて鍛冶
ハ止むことを得ず歎きつ、命の如く之をせりて振分
髪といふ銘をせりて奉つる政宗之を脇差に成してかく

てこそあれとて悦ばれける此鍛冶こそいと風流なる男
かりけり業平朝臣の歌に「くらべこしふりわけ髪もかた
まきぬ君ならすして誰うあふへき」といふ歌の意もてか
くせしものありとて君も臣も人々もともに感しけると
ぞ此刀ふりのけ髪といふ名物となりて後々ぞてし仙臺
の家藏となりぬ

○天一坊と中川正軒

修験者の改行といふもの將軍吉宗の落胤ありと詐り自
ら源氏坊天一吉種なと、いといりめしう名乗り亡命無
頼の徒を従へて非義を企てしハこれも享保の十四年を
りきそれより十年はかりも以前同じ享保の三年なりけ
ん「紀伊光貞卿の遺腹にて当將軍家の兄弟なり」と唱ふる

もの江戸にあらはれぬ其筋の者これを吟味せしふ少し
も実なく中川正軒といふ浪人なりけり吟味の節に町奉
行り大膽者の何としてさる不法を働ましむと叱りしに正
軒ハ笑ひなうら事若し成らされハ獄門磔ハ覚悟のこと
なり天晴れ男子と生れをうら碌々として死をんぶりハ
どりう名をあげん事をくに本望にてれといひたり
罪定まりて刑場に到りしとき賊手の非人に向ひ「死人の
衣類ハ皆汝等のとるにや」と問ひしに「然りと著へしハ
さらハ血に汚れさるうちに脱いて遣はさん」とて赤裸々
となり自若として斬られふりとる人狂言傍語にいふと
ころの天一坊ハかの修験者とこの浪人とを加味して面
白う作りなしとるものなるし昔し晋の桓温ハ枕を撫

して「芳を百世に流すこと能はば、臭を万年に遺をへし」といひき正軒はこれらをき、て非法を思ひ立ちしにやあらんまた昔し希臘の人ハ「その名を忘れぬ名を後世にあけんとあせれ」とも其方便なきに苦みしうやゝて有る名かゝる殿堂（パーセル）なりしりこれも名を忘れたりとて焼きたりせハ後の人々「彼れこそハ放火せしものなれ」とて戒り名をいひ傳ふるならんとはははりに思ひつき遂に建築彫刻の美を尽くしよるさしもの殿堂を一炬に附しりといふ世に馬廐の大智慧はりり恐ろしきものなれといふハこれらこそいふあらぬ

○犬公方

徳川五代の將軍綱吉公ハ犬公方さまとて其名高き人な

りもと此將軍ハ決して凡庸の方にてハあきにて何とてかゝる浅ましき諱名を得られつゝと尋ぬるに初め此將軍に一人の嗣子ありけり此上なく寵まれしに不幸にして夭死したまひぬ其後如何にもして嗣世を挙げんと希はるゝこと大方ならされとこればかりハ將軍の力にも及ばず始終歎き悲まれけりこゝに知足院隆光と云ふ一僧侶「嗣子の無きハ前の世にせし殺生の報いところ中しハへ將軍嗣子を求め給ふとあらハまの殺生禁断し給ふへし且つ成年の御生れにて聲せハ最老狗を愛み給ふへし」と勧めたり兼てより尊信院からさりし隆光の申を言われハ綱吉公深く之を信し貞享四年の春の頃より畜養を憐むへき旨の法令漸り出てそめぬ其当初ハ牛馬

いもとより凡て生あるもの、煩ひ重ことあるも未だ死
せざるうちに棄つへらるる飼犬を失ふ時、如何にもし
て尋ね求むべし、逆ひ狗来らば、怨に當り置る其飼主と搜
して還し与ふべし、なといふ軽きことありしり、次第に犬
の戸籍帳作り公用ある者にて、も途上に狗の喧嘩を見る
ときハ水を洒いて之を仲裁せしめ、魚鳥を販る事を禁し
森林に巢を結へる鳥を保護し、町人の鶴屋といふ号をと
かへ或ハ什器に鶴の章を画くことを止め、又是迄の習は
しかりし諸侯に雲雀を賜ふことをも廢し、れハ一時ハ
鷹匠に侍られ、傲然として、將軍の臂にとまりし鶴も、今ハ
武藏野に放されけり、遂に元録の七年といふに、犬小屋を
近郊の中野村に取建て、町々の犬を驅りて、茲に養ひ、犬小

屋支配と称ふる、役人之を守る狗の聚まるもの、数万頭存
下の民に課せて、その養料を辦へしめ、ぬ狗一頭につき毎
日凡そ米二合五勺の割合なり、斯く夥しき畜類の集會せ
しこと、かれハ夜となく、昼となく、吼え、猛りて、喧しき事い
はん方なし、或ハ噬み合うて、互に劍を蒙り、或ハ病人を臥
せるものあるときハ、狗醫者、可憐に之れを療治せること
あり、されハ一方にハ、この煩はしき掟に觸れて、罪に抵さ
る、ものも亦おぼかりき、臺所御番頭ある天野某といふ
ハ、厨の井戸に猫の屍ありしを、心付かさりしとて、ハ、丈島
に流され、其子孫ハ禁錮せられ、ぬ秋田といふ御小姓の家
来某ハ、吹失もて、燕を殺し、かハ、死罪評定所の畜狗何處
にてり、喧嘩して、斃る、者ありしに、目安讀の坂井某、之れ

を等閑にせしめて厳しく閉門を命せらるゝ、さまなりけりまして庶人の罪せらるゝ者の多かりし言ふ迄もなし罪未だ定まらざる中に牢屋の中に哀れなる最期を遂げし者もまた少からざらんかく嚴に殺生禁断を授てられしりと將軍に、遂に嗣子おかりさ次の將軍家宣公軍職を継かれしとき先將軍の位牌の前に跪き泣いて其の已むを得ざる故よしと告げて逸早く北禁令を解きまゝ、中野の犬小屋をも取毀さぬめられぬ天下の人々の喜ひ如何はかりありしからんこの犬小屋の諸色入用と香を付けたるものありおかしく覚えし、に其一部分を話さん

一銀二百六十四匁七分三厘

生香入用

あぢ。さより。さき。石もち等

此の重き病犬に見計ひ 焼きゆりまたの味噌汁にして換わて毎日朝夕とも食にませて給させやん

一銀三百六匁九分五厘 干香入用

ぬ二百九十二匁 かつを節千二百節

此の御犬食口(不明)のかへ削りかけゆり又ハミを汁煮出しめて給させやん

一七百二十七匁 小買物 犬のくしをさゆふと此中こあり

以下畧す

○奇翁自らの死期の踏行き曲を作る

嘉永元年某の月某の日に已れ身まかるへしとて葬式の道行きを戯作して之を板にまゝをり人々に配分して贈

りしり果して文句の如くに往生せりと云ふ奇翁ありて
ハ日本橋通二丁目に鐵屋善兵衛と云へるものなり家ハ
既に子に中つり乐隠居と号して心のとかに日を送りし
り生来浄瑠璃を好み年積りて八十に及以北の事ありと

ひろかみ六子

乗董 蓮路往

板元蓮の乗董往

笑草拙の置みかけ

焼香場を設

口演

乍憚口上とみて申上先ハ私存生の間承々御顯質に被
成下候段飛去りましとる心魂不徹しいり計り有ったい
冷汗に奉存まを扱私事各様御存しの如くお江戸根生に
数おらぬ拙き身をも真直に安婆と程よく通町町にて死

出の旅衣けさ裁ち深めて来る珠敷の玉もか、やく浄土
より厚く御礼申上たく兼て認め置きましとるお人物笑
ひの名残り壽き長き諸君子の御廻向の程庫裡から角ま
て編に奉款上候北度往生左様に思召下され賀死

法のかと花の路ゆき

歳毎に春ハ来にけり夏木立秋ハ墜葉とふと雪のつり
て老の身のなしみ重ねし人々一名残ハつきじ本願
寺極楽浄土の旅立や道中をこ六振り出しの賽の河原を
餘所に見てから銅擬寶珠日の本に名高き橋を打ねたり
無漏の町々道をゆけハ本町筋を真直に右へまはれハ古
着吞凡に散り行く柳橋流も清き法の水汲みかはしとる
言の葉の名にや芳町かきあつめ片身にのこし御藏前軍

のあゆみ駒形の別れ道より右へ行蓮の臺の花川戸こゝも名高き山の宿金龍山下尾町今戸橋場もちかく鳴る鐘の無常を告げて行く尊い寺の門徒にて一心一向をむあみた清回山称福寺み堂にこそは着きにけれ

嘉永元年申年十一月廿五日

先祖代々叶行年八十翁

俗名

通二住 銭屋 善兵衛

○難波名物男

大坂備後町堺筋の豪高河内屋太市兵衛といひしは安永より寛政の頃まで浪華に名高き滑稽家にして河太郎とハ此人の事なり常に談ずるところ能く顔と解き終日対座をれとも人倦むこと無しといへり一生の奇行多き中

に狂吉の舟遊ひに乞食の趣向せしハ最も世に流布せり談ふり浪華の風俗にて彼岸の茶の子といふものを家毎に配る事あり彼岸会のこゝろさしなれハ皆齋物を専とし薩葡四五根豆腐一挺胡薩葡牛蒡の類其外何にて七價十四五錢くらゐより廿四五錢程の物を配るを例とせり河太郎思ふやう彼岸の茶の子何れも同じ物をやのこり取つよりにて無益の事あり何れ後に残りて用に互つものを配らむものと或る彼岸に多く買入れ置きたる竹を物干竿を一本つゝ配りけるを人々ハをかしま茶の子ありと笑ひし後々まで用に互ちていつまでも河太郎の名をいひ續けしとぞある秋の彼岸八月十五日中日にあたりける時五六寸周囲の小さき笹の上を白紙にては

りつめそれに彼岸の志河太郎と昏付けて配りけれハ黄
ひたる家にてハまた何ハ趣向かと思れハ筈の中にて何
かハ知らず揺くものありに不審して紙を引放せハ中よ
り一羽の雀飛出さして逝去ると彼岸の中日なれハ放生
會の意なる一しと合点せり然して跡に筈一つ永く勝手
元の調宝に遺りけり

○西の丸出火の始末

此の手翰ハ何人の筆に成りて何人の許に送りしもの
らつと知らずと雖も昏中の文言及び其筆意に依りて察
せらるに當時相慶なる公儀役人の昏かれしものあること
疑なき如し又手翰ハ別啓のみにて本昏を失しこれハ
年号ハ何代の頃にも別然せされとも三月十日西の丸御

臺所より出火云々とあるを見れハ必そ天保度西の丸出
火の事を降へらるものに相違なし而して同年の災ハ事
公儀に關するものなれハ世間能々其折の模様を知ら
のなく又之を記述しらる昏物としてなれし此の手翰之を
寫すこと詳細悉明毫も遺憾なく一たひ之を讀まハ當時
の光景歴々として面より觀らる如きの想あり昏中此の
火災の爲めに珍宝奇物多く烏有に屬し總かに取り出し
らるものハ百分の一に過ぎず何れ故に斯く焼失の甚し
しかりしかと尋ぬるに當時將軍家急遽狼狽して何れハ
り身を隠して火を避させられらるを以て役人共其御行
方を尋ぬることにて奔走して火を救ふ方に手廻はら
さりしり故あり是れ皆を天々徳川景代の驕奢を咎めて

此の餘殃を降したまはらるりと忌憚るく昏き立て又
災後の處置法をと詳しく録されしを覽るに中々尋常役
人の輩といふ思はれざるなり依て殆らく本欄に収めて好
事家に示めを

二啓申上り御開廟及も御歴り過去る三月十日朝六ツ時
過ぎ西丸御臺所より出火にて御殿奥表共不殘炎焼仕相殘
ん分者西丸御大手御門御櫓向並御后院御門御番所裏
の方者坂下御門裏門内太鼓櫓山里庭内等七ヶ
所其外一切相残り不申焼失右の内内裏門者半焼に
所々しもの金殿半時餘の内にて時節といふ申炎焼仕
右に付奥表共に御道具類は一切出し不申先の大御所様
の方御后間の方者御道具是七領の内二領者出五領焼失

其外御差替の大小二通さんこの刀懸而已出其他の不殘
焼失剩太閤様より御拜領の御鎗迄焼失御手元の金銀宝
器其数不知焼失仕り大御臺様御手道具は一切出不申
薩州御持参の三池典太の長刀迄焼失に付得者餘の侍
察可被遊り既去九月中御移替まで私共手にて番付仕西
丸へ送り長持の数御二方様の分斗二千八百四十棹に
付此処此度右の内三十七棹出其他の不殘焼失外に右長
持に不抱はかい桶杯ハ一对七十兩餘懸り分斗り四百
対是にて御道具の焼失分餘ハ御察可被遊り扱又表方の
方ハ小納戸にてハ金子八万兩羅紗の類何万端其外品々
其数不知是ハ火の廻り方早く故諸昏物迄出不申漸進
出位に御座り御腰物方ハ御納戸の障役所に付

共手廻し宣く不残刀劔類者出小道具も出印籠中着り類
而已焼失仕り長局の方ハ即年寄方ハ勿論未々迄何も出
不申不残焼失何も同様中に七老女梅岩殿花町殿杯ハ是
迄諸大名参勤に受納致しハ黄金計り兩人にて二百十八
枚其外の重き女中杯も七枚三十枚も焼失通用金銀
の類ハ不知數焼失仕り十三日ハ十八日迄灰取片付の節
ハ山留守居所用番の頭ハの被中渡にて私杯ハ昼夜共
主役にて立会奥向にハ不構長局向計りにて焼失の金銀
都合同方にて金座元引替に相渡ハ分計り而四貫目余銀
座元相渡ハ分百七十貫目余座元是にて山寮可被下ハ
私杯ハ当番明にハ元ハ故西丸一直く欠附始末荒増見受
殊にハ欠附ハ常ハハまた御廣敷長局向元大懸り不申故

所用部屋一参りハ処所用人の差圖にて呉服山買上計の
代金二千五百兩程有五分三人にて持出し井戸の中へ投
込引返し参りハ処最早烟り立込ハ故直に大奥山座の間
辺一参りハ処大御所様御立退有之大御臺様も御庭へ
御立退にて夫ハ長局の女中追出し居ハ処御老中越前殿
一人にて欠附被参り日人直の山下知にて女中衆不残追
出し山里の大目御門開き吹上大道通り一遁れ出夫より
又紅葉山下ハ一引返し参りハ処最早猛火盛にして御裏
御門脈に始終見物仕罷在り古互譯故御道具類ハ出て不
申誠に以て始よりの始末不思議にハ元ハ元夫にハ殿々
譯も御老中得者不手都合不手廻一同共狼狽仕り譯左に
申上り元始末ハ夫々向ころ表奥共承り合實に申上り同

御笑可被遊々

一十日ハ御小納戸御入人の御撰にて吹上御見物にて御直の御撰にて大御所様公方様共五ツ時の御揃にて吹上御成の積に御座ハ日夫故吹上御見物下に御撰に可相成御旗下衆上下にて詰居ハ者八百人程是ハ七ツ時より詰居申ハ

一大御所様御事御小納戸松下平六と申者へ前夜の被御渡にて御庭の松葉菊御手入被仰付ハ故古六平と申人六ツ時起御庭へ罷出松葉菊手入いふし居ハ知御臺所辺屋根より大気相見ハ故直に御座敷へ欠込大變有之ハ旨二声程申ハ知頭取美濃部筑前守申ハ大變ハ何事ヲ御前遊々小大變といと申叱りハ知其声大御

所様御間有之御庭え御出の処火事に相違も無故御驚被遊々哉又ハ血暈被遊々哉御居間御入にて戸を建被遊々右に付御小性御納戸者火事の所大御所様御姿不見故大御所様の御在所を尋居漸々御連申上御庭へ遊出申ハ夫故御小性御納戸三十八人泊り居一品も御手道具ハ勿論何も出し不申刺へ三十八人の内一刀二刀帶シハ者七人内一刀五人二刀ハ兩人其外ハ九腰に御座ハ誠に狼狽武士と可申者に御座ハ平生御三の間迄帶劔御三の間も御次の間も間に帶劔を取り故右様見苦敷事に御座ハ又御道具も燒失御小性御納戸に働無之譯ハ大御所様狼狽血暈にて御居間へ御入戸を建被遊々故ハ可有ハ座ハ應御立退の當ハ九腰の者斗

にて見苦敷事に可有座作恐不法者五七人も有之
得者 大御所極御身危事に此座は是にて餘ハ御察し
可被遊ハ

一表方ハ御小性組御春院兩御番方の者御座敷四方へ火
廻り戸の間より火烟入りても矢張上下の傍にて座
し被在後には疊の間より烟り上りても動さ不申安
座仕居由是も御目附より立と中下知無之中ハ立不
申此規定と心得安座仕後に焼死仕ハ縁に至り漸々逃
出レ義に此座ハ誠に以非常不心得者而已多く百人
の者ハ居り居御納戸元御さにも不参御目附の差圖無
之中ハ動不申譯杯と申四方火に成レ迄くつくと安
座仕ハ何と申もの歎一向論にかゝら言語同断に

此座ハ太平長續いさし得ハ世の中馬鹿計り多く相
成りハ歎ケ敷御座ハ右の譯故一切可出物出不申義
に御座ハ只々少々働さハ者ハ小給者而已に此座ハ
右の譯にて余ハ此察可被遊ハ

一私共御裏御門脈にて見物仕ハ此一生にも是を面白
き事に見請申ハ昔の一の谷の軍又ハ神祖甲斐と味方
原に敗北の時ハ此通に可被為在奉存ハ先づ御本丸追
手搦田共當番加番の大名出張其外御三家方御普代大
名不殘御先手同心に至迄弓鉄砲旗馬印押立さしもの
下馬廿尺も無之諸君西丸下ハ松平甲斐守人数旗四流
武田びしの馬印押立其外大名十人計り諸君ハ組横合
より松平大和守松平周丸松平上總助の人数関を作り

坂下御門より西丸紅葉山一消亡に繰込續て松平肥後
守の人数関と作り是も坂下御門より乗込の様子城を
乗取の勢ひにて北方の城の燒る紅葉山下より吹上蓮
池御門の方の千人計りの女遊散様子落城の城の北通
にも可有之思ひ無意無心に見居り誠に二度と無之生
の軍を見物仕の様に見申れ其外定火消町火傍西丸よ
り横田迄に詰居り誠に以言語筆紙に述りたく御察し
可被遊々

一御炎燒御普請早速被仰出先々荒増の御入用高一坪二
百兩當てに仕惣坪數四千八百四十坪と申事に以座
尤是の屋根下の斗に以此の大体百兩と申積りに以
座の諸大名御手傳にて是迄出金の高滴詰尾紀兩家

にて五十万兩の上加州十五万兩薩州十萬兩柳原三万
兩松平甲斐守三万兩秋元一万五千兩其外寺社奉行一
人に付三千兩つ、御養者も三千兩つ、御側衆一人に
付五百兩御留守居三百兩つ、杯と申先つ、百萬兩迄
く寄集申れ得、御入用の澤山に可有此の由を表大
名國持杯へ、何も無之の得とも追々是も上納金被仰
付の事と奉存の御普請の義の思召通本より宜出来上
り可申れ得共御張附向杯の連も以前の通にハ参り申
敷の御炎燒の御張附の不殘共探幽の筆に御座り此
度の奉門位の事に可相成奉存又御炎燒の西丸御
黒昏院の御床板の寛永年中琉球國王献上の板にて紅
くわりん巾六尺長さ三間厚九寸三枚に以此の御炎燒

仕北度ハ何に相成リハ哉連モ以前の通りノ板ハ有之
間敷奉存ハ

一 地取ハ品川御殿山より取寄ル積に相成リ是モノ上可
三天入替ル積りに法取ル故荒積り出引計に十萬三千
兩と申積に以テハ

一 御炎燒後御本丸に以テ居に以テハ知北帝何と云ク騷
ケ敷一同浮足に相成北上共何款愛も出来ル様存居
奉因入ハ

一 御善請ハ殊の外御急ぎにて明年中に御引移出来ル様
に申事に以テハ北帝ハ右の事にて外以用向ハ何事
も打控に相成居混雜繁乱仕居ハ假而察シ可被下ハ
一 御炎燒後大御所様の御事を一同あしく申唱ハ其譯ハ

台徳院様有徳院様御兩君西丸へ御隠居にて御政務の
事ハ勿論何事も御構無之事に以テ廻當時 大御所様ハ
古兩御代の事と師と云させられ在来の御殿と様を
様に御思召一昨年より新規御殿造り増柱一本三十九
五兩杯と申花美の奢侈被遊ハ故北度の炎燒ハ天罰杯
と申唱ハ北上尚又御慎無之奢侈被遊ハハ、乱の本杯
と申一同北帝市中とも騷ケ敷人死不治罷在ハ

一 御炎燒後御城守大の元別てハケ間敷私共下部屋迄時
半に御廣敷番の頭見廻り其間に御徒目附火の番参り
見廻ル故夜分ハ少しも眠り不申此通に以テ得ハ續不申位
ハ以テ死ハ

右殿々申上ハ如未色々申上度ハ得共筆紙に尽かこくハ

尚途々可申上ル己上

四月十一日

○後女の逸事

先の年諸所の寄席に出で一流の春柳節と語りし春柳志女壽の実母をおまゆ人と云ふ御幕府の御用達町伊勢屋重兵衛の女なり少時より清元節を嗜みて研習怠らざるに斯道の奥と究む屢々招かれて諸侯の奥御殿に到り瑠璃と語り一人の三味線弾某を随へて行くを常とす後に某疾で歿をお後歎して曰く世間には後而の三味線弾ありと虽も某の如く我意を得たる者一人も無しとこれより絶て淨瑠璃と語り事を罷め諸侯より招かるも固く辞して行かざりしとそ伯牙の故事を思ひ出られ

てをかし

○雪山飯炊となる

享保の比小網町の米間屋某方に飯炊をなせり一人の老爺ありしに兼て主人に頼み置る月に五六回つゝ見苦しき衣服の上に羽織を打掛け昼前後に家を立出下日暮てより飯宅をれとも別に用を欠く事もなく実体に勤めし申ふ主人ハ勿論手代共もその終に打捨おさぬ或る日主人凡と心付きて店の者共に彼老爺ハ何所一行くやと尋ねしに皆知らむと答ふさらハ渠り出て行く跡を追ひ密かに其行先を見届けよと手代して其跡を尋ねさせ一諸侯の屋敷へ入りより手代ハるほも様子を探らんと其迹傍にみみ居るに裏門の番人老爺を見てこと

く踽踽し丹玄園に至れハ取次の者も念頃に一礼をなして
奥一案内をる様子いかにも重々しく見えけれハ手代
もさてハ常人にあらむと思ひ立ぬりて志る
の趣主人に語りけるに主人も大に驚き右手代を其後前の屋
敷一遣はしかの老爺の素性を伺かはせけりしに渠ハ雪山
といひて当時世に稀なる筆道の達人なれハ当家而主人
にも今渠を師として筆道を学一りと教一示しけり由亭
主この事を知りて急に彼の老爺を招き御身々志か
御身分をること此たひ始て承知いたしぬさるにても不
審しむハ我家に鄙しむ奉公をなしたまふ一事あり何を
御所存にやと問ひけれハ老爺今ハ包むに由なくいか
にも我ハ雪山をるる年老て筆道指南も面倒なり世に立

交はらんも氏族親族もかれハ無益なり心安く世を送ら
んにハ市中かゝる処に在れハ自然人に知らるハの憂も
なしとさてこそ飯焚といふりつれされと二三軒窓かに
通ふ所ハ我心を能く知れる御方々にて隨意に交りたま
ふ申ふ事かゝるありと申しけりしにそハ尤もの事ながら
斯く尊名を知りし上ハ打捨おけしとて亭主別に一巻
を設け生涯を安楽に過させしといふ事守臣翁の身囊に
見えたり

○梨園の落葉

文化の頃中村歌右工門江戸に下りて諸人の喝采を得て
芝居大入なれハ歌右工門高慢の鼻を高りやかて大坂へ
登る時の落葉に

こきもとをあとに聞あり花火舟

とありこれの当時同しく名譽ある坂東三津五郎心憎き
ことに思ひ蜀山人のもとに行き何卒彼れをへこまは
との句を詠んで下されと折入つて乞ふにぞ蜀山人取敢
へす

年々の花火のたえり川開き

と詠みて返せしか三津五郎もこれみて腹癒せたり
とて喜ひし由

又市川團十郎(七代目)或る時仁木禅正を勤めしに舅松本
真高の手振りに由申違はも出藍の譽高かりしか狂歌
堂真顔

たれやらにさておく につきたん十郎

かろしろとてやをーにおまけん

と詠みしを北慎言聞きて尚ほ云ひおほせされハとて
斯くおん詠みおほしり

たれやらにさておく につきたん十郎

かろしろとてやをしへうけらん

と亦に藝苑の一佳話といふ一し團十郎ハ幸四郎の婿に
て何れも幸四郎の教へ導けハその由をよめるあり

○錢か承知せず

大久保組屋敷の同心某当夏(文化の頃なりし)鯉賣を呼
び直股等対談に及ひ所一尾に付三百錢と申す故二
百銅に負けし様申しけれハ直股心に應せざるや不興氣
にて自分ハ高一度ハ一共鯉のいやと申承知の由にて

去らんと思ふを呼止め然らば其方の中を直段にて買
取る一き旨中且外にも二三尾ありしを残らば調一中を
へき段中の所実事にやと尋ね故いかに小身の者には
とて馬原に致しぬ哉残らば差身又ハ羨ハやう振呉れ中
をべき旨中付即ち料理いたし仕舞ひに処さらハ代錢拂
ふへき旨にて錢を取出し置き扱自分ハ買ひ積りにハ
一共錢ウいやと承知致さむ間折角料理まで致し呉
れ一共断りぬ旨中相違しぬ由右高人憤りぬて色々やハ
一共最初の爲言申一仕方なくをごとく立故りぬ由

○尾上菊五郎の執拗柳亭種彦の敏才

一と年尾上菊五郎三代目なりし上京し某芝居の興行
に梶原の役をつとめ揚幕より出て一と通り臺詞ありて

「家来草履して」といふべきを「家来若さうりもて」といひけ
れの名にしおふ言葉の違ひやかましき京の見物ゆゑ大
いにどよめきイヨ志やうりといひはやされ流石の
菊五郎大さふ赤面し其日ハをましける又其翌日には
り言ひ改むへきを死性強き男中急三四日つ、け「志やう
り」といひけれハ見物なほ「かしましき仕舞にハ舞臺
一出さへをれハ志やうり」と声かけられいかに心
外の事と思ひ居しに幸ひ柳亭種彦上京致し居るよし聞
えけれハ菊五郎旅宿へ尋ね行き右の由つふさに話し何
卒この恥辱を、さく工風ひさむら頼みけれハ種彦志は
らく恩業しかやういふべきよし指南してくれけれハ
忝く了承し其あけの日舞臺にてやはり「志やうりもて」と

いひければいよく見物やかましく暫く鳴も志のまら
さりしやりて菊五郎思入あつて志の志といふやうい
お江戸と違つて上方の利得に敏く字学に通しこの梶原
かたじけなくも右幕下公の御覚えよく殿中にても杖
御免志やう杖ありが履なり家来杖履もてといつよ
りもなほ大声に言ひけれ見物一言もなく謝り入し
とそ柳亭大人の即智菊五郎の気性また得かよしといふ
し

○木阿弥翁狂歌を以て人の咒詛を解く
もとの木阿弥ハ安永寛政の頃狂歌を以て世に聞えたる
人なり一日麻布の稲荷へ詣てしに何者の所業にや人の
形を画きて眼に釘のさしあるを見て筆を執り

目を昏て祈らハ鼻の穴ニッ耳てをけれハきく事ハを
と昏て札を下けらに聖の日古の人形の耳へ釘をさし
ける申一

目を耳にか一をも打釘ハ聾人はとも猶きかぬなり
と斯く認めて再ひ札下けしに此度ハ繪を止めて蒙人形
と造り一面に釘をさしけれハ

稲荷山まかぬ祈に打つ釘ハ糠にゆかりの蒙人形
と昏てまたく札を下けたるは是れに困しけん其後ハ
右の人形も見えをなりぬとそ

明堂室

明
成
七
年

十一

